

# 県道関係埋蔵文化財発掘調査概報

平成7年度

百 相 坂 遺 跡  
小 山・南 谷 遺 跡  
八 丁 地 遺 跡  
兀 塚 遺 跡  
寺 田・産 宮 通 遺 跡

1996. 3

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成7年度』 正誤表

頁	行	誤	正
巻頭図版		I, II区SB01	I, II区SB07
7	35	『高松平…形環境』	「高松平…形環境」
7	36	「讃岐国…報告書」	『讃岐国…報告書』
11	5	国家座標	国土座標
27～28		下段 = IV～VII区	下段 = IV～VI区



1. 寺田・産宮通遺跡 I, II区 SB01



2. 小山・南谷遺跡 V-3区 SD701

## 例 言

1. 本書は、県道改良事業に伴い平成7年度に実施した百相坂（もまいざか）遺跡、小山・南谷（こやま・みなみだに）遺跡、八丁地（はっちょうじ）遺跡、兀塚（はげづか）遺跡、寺田・産宮通（てらだ・さんのみやとおり）遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査組織は、次のとおりである。

### 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所 長	大森 忠彦
	次 長	真鍋 隆幸
総務	参 事	別枝 義昭
	係 長	前田 和也
	主 査	大西 健司（平成7年5月31日まで）
	主任主事	西川 大（平成7年6月1日から）
調査	参 事	糸目 未夫
	主任文化財専門員	廣瀬 常雄
	係 長	大山 真充

（百相坂、小山・南谷遺跡）

係長 藤好史郎  
文化財専門員 中西 昇  
調査技術員 東条貴美

（八丁地、兀塚遺跡）

文化財専門員 蘆原秀稔  
主任技師 蔵本晋司  
調査技術員 門脇範子

（寺田・産宮通遺跡）

文化財専門員 西村尋文  
文化財専門員 中村昭浩  
調査技術員 松尾 歩

4. 調査にあたっては、次の機関や方々に協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同敬称省略）  
香川県土木部道路建設課、香川県高松土木事務所、香川県長尾土木事務所、地元各自治会、地元各水利組合
5. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。  
SA：柵列 SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 SH：竪穴住居 SK：土坑  
SP：ピット SR：自然河川 SX：性格不明遺構 SZ：その他の遺構
6. 挿図の一部に国土地理院地形図(1/25,000)を使用した。
7. 本書で用いている国土座標系は第Ⅳ系であり、方位はT.N.を付すものが真北、それ以外のは国土座標系による北をあらわす。また、本文中に使用した例えばN20°Wとは、北方向から20°西の方向を示すものである。
8. 本書の執筆は、調査各担当職員が分担し、執筆者名は目次に記した。また編集は蔵本が行ない、門脇が補助した。

# 本文目次

I. 調査の経緯と経過	(藤 好) 1
II. 百相坂遺跡	
1. 遺跡の立地と環境	(東 条) 2
2. 調査成果の概要	
(1) 水田遺構	(中 西) 3
(2) 堀立柱建物	( " ) 5
(3) 柵 列	( " ) 5
(4) 集石遺構	( " ) 6
(5) 土 坑	( " ) 6
3. まとめ	( " ) 7
III. 小山・南谷遺跡	
1. 遺跡の立地と環境	(藤 好) 8
2. 調査成果の概要	
(1) 調査区の設定	( " ) 11
(2) 主要な遺構	( " ) 12
3. まとめ	( " ) 17
IV. 八丁地遺跡	
1. 位置と基本層序	(蔵 本) 20
2. 調査成果の概要	( " ) 23
3. まとめ	( " ) 23
V. 兀塚遺跡	
1. 遺跡の立地と環境	(蘆 原) 26
2. 調査成果の概要	
(1) I 区の調査	(蔵 本) 29
(2) II・III 区の調査	( " ) 30
(3) IV 区の調査	( " ) 32
(4) V・VI 区の調査	( " ) 32
VI. 寺田・産宮通遺跡	
1. 周辺の立地と環境	(中 村) 37
2. 調査概要	(西 村) 41
3. 遺構・遺物	
(1) 弥生時代中期	( " ) 41
(2) 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭	( " ) 42
(3) 古墳時代後期末	( " ) 44
(4) 平安時代以降	( " ) 45
4. まとめ	( " ) 46

## 挿 図 目 次

第1図	遺構位置と周辺遺跡……………	2	第20図	Ⅲ区第2面遺構配置図……………	31
第2図	遺構配置図・調査区割図……………	3	第21図	S R 04土層断面図……………	34
第3図	水田跡土層断面図……………	5	第22図	出土遺物実測図……………	36
第4図	集石遺構実測図……………	6	第23図	遺跡位置及び周辺遺跡図……………	38
第5図	出土遺物実測図……………	7	第24図	遺構配置及び調査区割図……………	39~40
第6図	遺跡の位置と新川以東の主要遺跡……………	8	第25図	S B 02平・断面図……………	41
第7図	遺構配置図・調査区割図……………	9~10	第26図	S B 02出土土器……………	41
第8図	S D 701井堰実測図……………	13	第27図	S B 04平・断面図……………	42
第9図	溝出土土器実測図……………	14	第28図	S B 04出土土器……………	42
第10図	井戸(S E 701)実測図……………	15	第29図	S H 04平・断面図……………	43
第11図	井戸(S E 701)他出土遺物実測図……………	16	第30図	S H 04出土土器……………	43
第12図	遺構と周辺地割との関係……………	18	第31図	S H 03平・断面図……………	43
第13図	新田町・高松町条里地割図……………	19	第32図	S H 03出土土器……………	43
第14図	Ⅳ~Ⅶ区遺構配置図……………	21~22	第33図	S B 07平・断面図……………	44
第15図	調査区割図……………	21~22	第34図	S D 01断面, 出土土器……………	44
第16図	出土建物実測図……………	24	第35図	S D 02断面, 出土土器……………	45
第17図	周辺の主な遺跡……………	26	第36図	S E 01平・断面図……………	45
第18図	遺構配置図……………	27~28	第37図	S X 01・02平・断面図, 出土土器……………	46
第19図	調査区割図……………	27~28			

## 表 目 次

第1表	出土遺物観察表……………	24	第3表	掘立柱建物一覧表……………	47
第2表	出土遺物観察表……………	36			

## 写 真 目 次

写真1	遺跡全景……………	4	写真14	I区全景……………	30
写真2	水田跡土層断面……………	4	写真15	Ⅲ区第1面全景……………	30
写真3	水田全景……………	5	写真16	Ⅲ区第2面西半全景……………	31
写真4	畦畔……………	5	写真17	Ⅵ区集落I全景……………	33
写真5	集石遺構……………	6	写真18	S R 04中層I遺物出土状況……………	34
写真6	発掘区航空写真……………	11	写真19	S R 04上層鉄鏝出土状況……………	34
写真7	S D 701・702……………	12	写真20	S D 02全景……………	35
写真8	S D 701・702土層……………	12	写真21	S B 02検出状況……………	41
写真9	S D 701井堰検出状況……………	13	写真22	S B 04検出状況……………	42
写真10	S E 701検出状況……………	16	写真23	S H 04検出状況……………	43
写真11	Ⅵ区総柱建物……………	17	写真24	S H 03検出状況……………	43
写真12	調査区全景……………	20	写真25	S B 07検出状況……………	44
写真13	調査区北壁土層……………	20	写真26	S D 02, S B 07検出状況……………	45

# I . 調査の経緯と概要

平成7年度の県道関係埋蔵文化財発掘調査（県道埋蔵文化財発掘調査業務）は、平成7年4月1日に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターと香川県教育委員会との間で締結した「埋蔵文化財調査契約書」にもとづき実施した。今年度の発掘調査は、高松市百相坂遺跡、小山・南谷遺跡、兀塚遺跡、志度町八丁地遺跡、大川町寺田・産宮遺跡の5遺跡で何れも直営方式で実施した。また、小山・南谷遺跡が当初計画から調査面積の変更増加に伴う変更等若干の変更はあったものの概ね当初計画にしたがって発掘調査を実施した。

県道三谷香川線道路改良工事に伴う高松市百相坂遺跡の発掘調査は、1,400㎡を調査対象として、平成7年4月1日から6月30日までの3カ月間で実施した。発掘調査では、弥生時代後期以降の水田跡と中世の塚の一部と考えられる集石遺構等を検出した。この内、調査前が水田である調査区東半の微高地上で検出した塚の基礎部と考えられる集石遺構から、中世において微高地上においては、ベースが砂礫層ということもあり、水田開発はまだなされていない。現在、この地域の微高地上の灌漑が、南部の平池や舟岡池の大型溜め池を利用したものであることから、今回の発掘調査で、この地域の水田開発の状況等を考古学的に推察し得る資料が得られた。

県道高松志度線道路改良工事に伴う高松市小山・南谷遺跡の発掘調査は、平成5年度から実施しており、今年度で3年目となる。調査は用地買収との絡みもあり概ね東の丘陵よりの地区から進めてきている。今年度の当初平成7年7月1日から9月30日までの3カ月で、2,038㎡を対象として実施する計画で、発掘調査に着手したが、隣接する県道塩江屋島西線の西側の用地買収があり、県教育委員会文化行政課の試掘調査の結果、埋蔵文化財包蔵地であることが確定した結果、当初計画に追加して発掘調査を実施することとなり、調査面積を2,654㎡、調査期間を11月30日までの5カ月間に変更実施した。

発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけての条里坪界に相当すると考えられる東西方向の溝3条とともに昨年度に引き続いて掘立柱建物跡・井戸等を検出した。また変更後の追加調査となった県道塩江・屋島西線以西においても坪界の溝は西へ伸び、県道以東では集落域が東西溝の北部に展開したものが県道以西では南部に展開することが明らかになった。また、この地域の条里地割の初現が、奈良時代までさかのぼる可能性が高くなってきたこと、また出土遺物では、奈良時代前半期以前と考えられる井戸排水溝内からの小型素紋鏡が出土するなど、集落の性格を考える上でも重要な資料を得た。

県道高松志度線道路改良工事に伴う大川郡志度町八丁地遺跡の発掘調査は、平成6年度に着手しており、平成7年度の発掘調査は、昨年度調査区に隣接する区画で、平成7年7月1日から8月31日までの2カ月間で、165㎡を対象として実施した。発掘調査では、集落域に隣接する旧流路が対象となっており、弥生時代以降の遺物が流路内の堆積層中から出土している。

県道三木国分寺線道路改良工事に伴う高松市兀塚遺跡の発掘調査は、平成7年9月1日から平成8年3月31日までの7カ月間で、5,000㎡を対象として実施したが、対象地内の宅地部を平成8年度に調査を実施することとなったため、平成7年度の調査面積は、4,680㎡となった。発掘調査では、古墳時代以降の集落跡とともに、埋没河川内から中世の水田跡を検出した。

県道大川東津田線の大川郡大川町寺田・産宮通遺跡の発掘調査は、平成7年度から平成8年度までの継続予定の調査であり、平成7年8月に計画準備を行い、現地発掘作業は平成7年10月1日から平成8年3月31日までの期間で実施した。平成7年度調査対象面積は4,404㎡で、平成8年度に1,544㎡を対象として実施する予定である。発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけての大型掘立柱建物等を検出した。

## Ⅱ . 百相坂遺跡

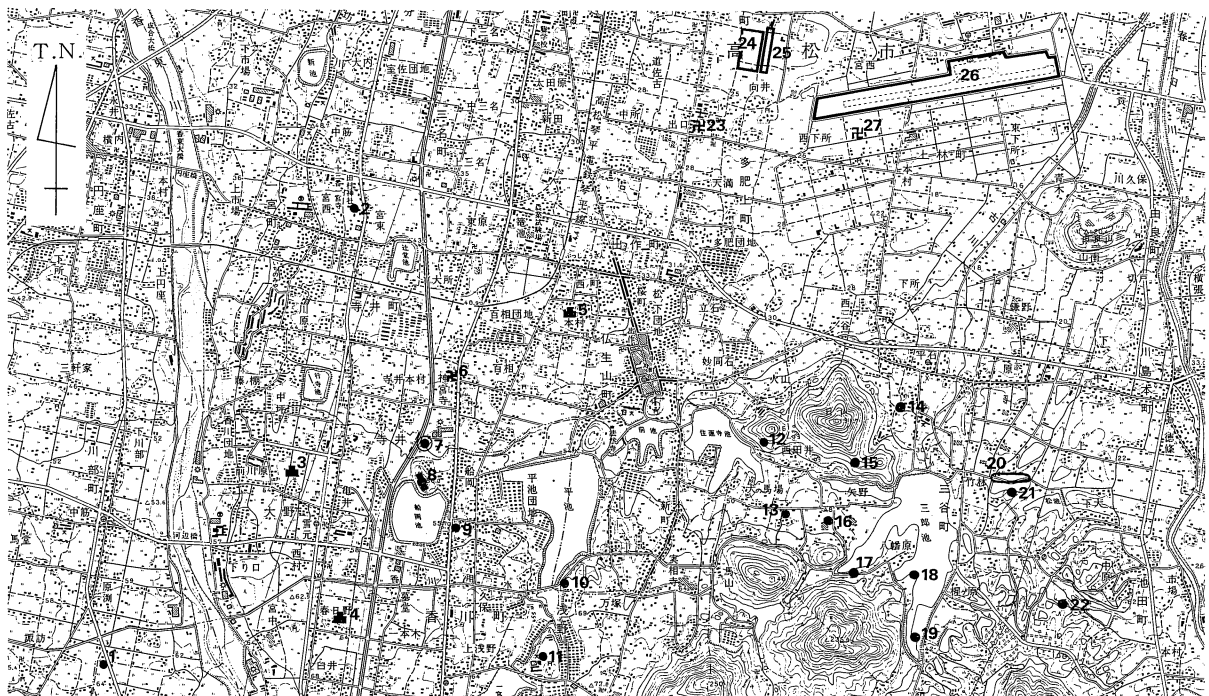
### 1. 遺跡の立地と環境

百相坂遺跡は高松平野南部，高松市仏生山町甲1382番外に所在する。現地表の標高は約48m。香川町浅野に近接しており，香東川の1 km程東に位置する。上佐山・日山など南方丘陵の山裾部にあたり，背後にひかえた船岡山より緩傾斜の微高地を中心に広がる。本遺跡周辺は香川町川東西部を扇頂とする香東川の扇状地上にあたる。大池に連なる地割りの乱れから，旧香東川の氾濫原を一部含むと考えられている。発掘調査においても調査区西部地表下に厚い砂礫層の堆積がみられた。

周辺の遺跡についてはこれまで発掘調査がほとんど行なわれていなかったこともあり不明な部分が多い。古墳時代には前期に南側背後の独立丘陵山頂部に双方中円墳として著名な船岡山古墳が築造された。また船岡山から国道193号線を挟んで東には，船岡古墳が所在し，横穴式石室の一部と思われる河原石状の石を使用した石組みが残る。

本遺跡から北へ500m程に奈良～平安期の古瓦が出土する百相廃寺が所在する。現在の舟山神社に相当し，神社西南には礎石が残る。

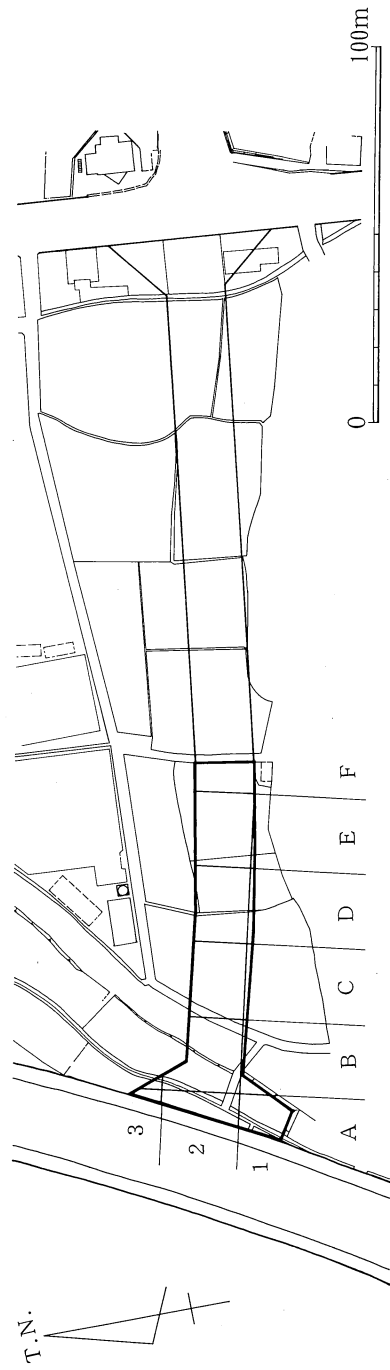
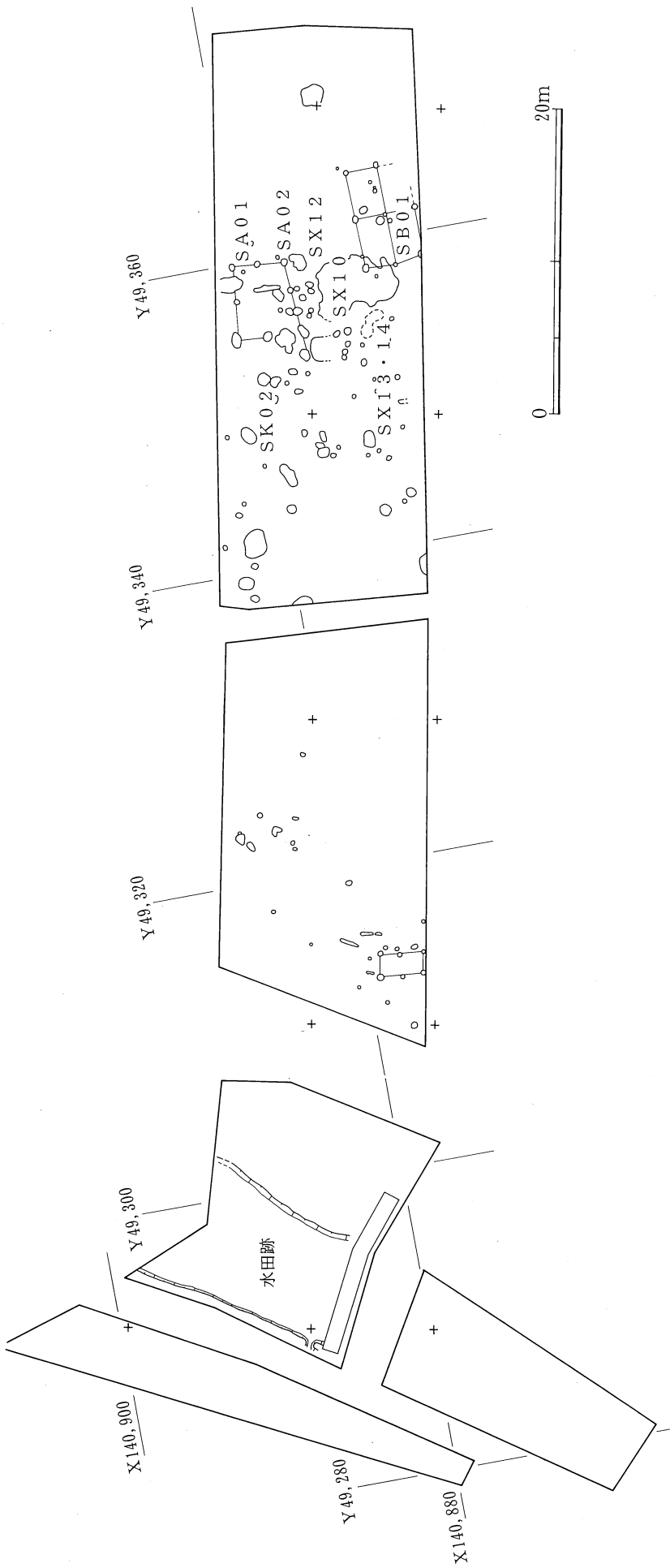
中世以降では源平屋島の合戦で源氏方に属した河西左エ門輝貞の裔，河西三郎左エ門を城主とした百相城跡があり，堀・石垣の痕跡が残る。同じく，大野新太夫有高が構えた居館跡を，大野南城と推定されている。香川町大野の代々大野氏が信仰している石清水八幡神社東500mあたりが城跡とされる。大野北城は室町時代に入り，摂津より渡ってきた佃氏が香川町大野に構えた居館とされる。



- |           |             |               |             |
|-----------|-------------|---------------|-------------|
| 1. 若宮神社古墳 | 8. 船岡山古墳    | 15. 小日山1号墳    | 22. 三谷通谷遺跡  |
| 2. 田村神社遺跡 | 9. 船岡古墳     | 16. 矢野面古墳     | 23. 多肥廃寺    |
| 3. 大野北城跡  | 10. 浅野万塚古墳  | 17. 三谷三郎池C遺跡  | 24. 多肥松林遺跡  |
| 4. 大野南城跡  | 11. 浅野八王子古墳 | 18. 三谷三郎池西岸窠跡 | 25. 日暮・松林遺跡 |
| 5. 百相城跡   | 12. 雨山南古墳   | 19. 三谷三郎池遺跡   | 26. 空港跡地遺跡  |
| 6. 百相廃寺   | 13. 犬の馬場古墳  | 20. 石舟池古墳群    | 27. 拝師廃寺    |
| 7. 百相坂遺跡  | 14. 平石上2号墳  | 21. 三谷石舟古墳    |             |

第1図 遺跡位置と周辺遺跡 (1/50,000)





第2図 遺構配置図 (S=1/400) ・ 調査区割図 (S=1/2,000)

## 2. 調査成果の概要

調査は、県道三谷香川線道路改良工事予定地と国道193号バイパスとが交わる地点から東に90mほどの間、1,400m<sup>2</sup>を対象面積として実施した。

調査区は、調査対象地が直線的に東西に伸びる道路予定地であるため、道路の中心線を基準として設定した。基準点は、調査区両端の道路中心点を直線で結び、8m南の平行線上で西端中心杭から直交する地点においた。西側をA列、東へ20m毎にB～F列とした。

本遺跡は、地形的には、南の船岡山へ連なる微高地と西部の埋没自然流路からなる。微高地は、調査区中央をピークとし、東と西に緩やかな傾斜をもつ旧地形が、水田化に伴う削平により平坦化している。基本層序は、耕作土下に遺物包含層である黒褐色もしくは灰褐色砂質土層、砂礫層となる。削平が顕著な調査区西部の農道東側は、耕作土直下が礫層となる箇所がある。調査区西部農道以西は埋没した自然流路で、耕作土下は礫層と粘質土が混在して堆積している。

今回の調査では、微高地上（C-2、D-2）は、中世の柱穴群と、集石遺構を検出した。畦畔を隔てた東斜面（D-2、E-2）では、やはり中世の掘立柱建物や柵列を含む柱穴群、及び土坑、集石遺構等を検出した。調査区西端のA・B列では自然流路、B-2区ではその埋没後に営まれた水田遺構を検出した。以下、主な遺構について、概略を紹介する。

### (1) 水田遺構

B-2区において埋没河川上で水田遺構を検出した。耕作土、床土直下で、弥生土器を包含する暗褐色土層及び水田跡耕土層を覆う暗灰色礫混じり砂質土層を検出した。耕土は明灰色砂質土層で、層厚は6cm程度と薄い。検出した水田跡に伴う畦畔は、隣接する水路のコンクリート擁護壁の工事により、部分的に削られているが、残存部をつなぐと検出総延長は、13.3mを測る。畦畔下端幅は、残存状況が良い水口南側で、約60cmを測る。また、水田面との比高差は、4～10cmを測るが、北半の多くは削平されており、辛うじて下端が残っているにすぎない。南北を区画する東西方向の畦畔は認められない。また水田の東端は、流路肩の礫層で限られる。本水田の面積は、南北を区画する畦畔が検出されなかったため不明であるが、検出面積は67.1m<sup>2</sup>を測り、それ以上の南北方向への広がりか推定できる。なお、水路を隔てた西側のA-2区で設定したトレンチでは、耕作土相当部が削平されており、水田面は検出できなかった。

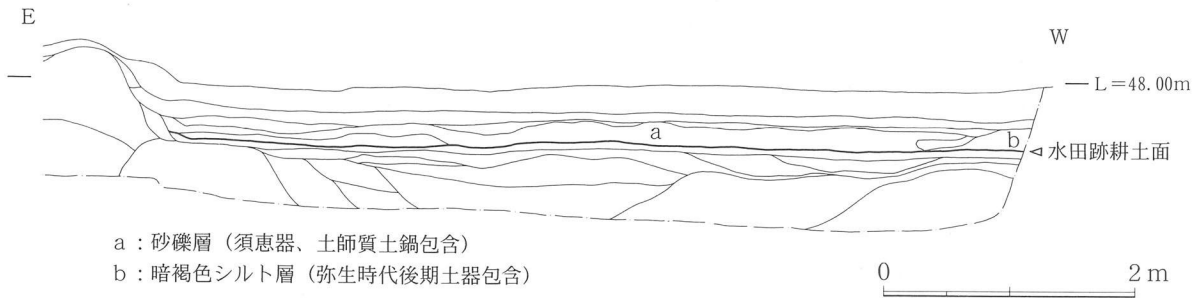


写真1 遺跡全景(西から)



写真2 水田跡土層断面(北東から)

検出水田域西部の耕土・畦畔直上を部分的に覆っていた暗褐色シルト層には、少量の弥生後期の土器片（第5図1，2）が出土した。しかし、その他の耕土面の大半を覆う砂礫層中からは、須恵器・土師質土鍋の脚等が出土し、しかも水田面には、砂礫層によってえぐられた形跡は認められない。このことから、暗褐色シルト層の堆積も、二次堆積と考えられ、水田の所属時期も、中世の所産である可能性が高い。



第3図 水田跡土層断面図 (S=1/60)



写真3 水田全景(北東から)



写真4 畦畔(南から)

(2) 掘立柱建物

S B 01 調査区東端近くのE-2区で検出した掘立柱建物である。一部壁際の予備調査トレンチや南壁にかかっている。梁間1間(3.8m)、桁行2間(6.3m)を測り、主軸をN-92°-Wとほぼ東西にとるが、南北に延びる総柱建物の可能性も考えられる。柱穴からの出土遺物は、第5図3の土師器小皿や須恵器細片等があり、概ね13世紀代の時期が推定できる。

(3) 柵列

S A 01 S B 01の北で検出した柵列である。2間(3.4m)検出したが、北の調査区外に延びる可能性もある。主軸方向は、N-5°-Eである。南端のピットから第5図4の土師器小皿が出土している。S B 01とほぼ同時期と考えてよからう。

S A 02 やはりS B 01の北で検出した。4間(6.2m)検出した。主軸方向をN-94°-Wにとる。各ピットからS B 01やS A 01同様の土師器小皿や須恵器片が出土しているほか、西端のピットからは第5図8の砥石が出土した。

#### (4) 集石遺構

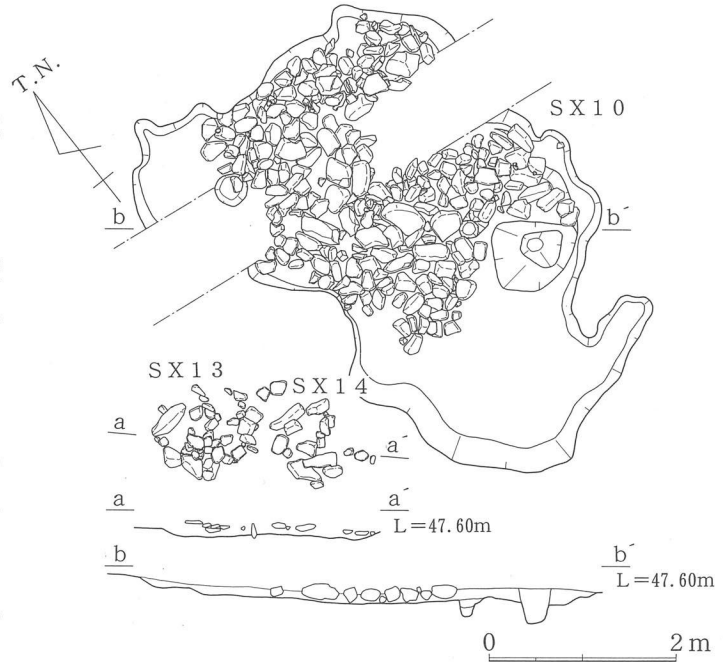
SX10 E-2区中央で検出した。県教委文化行政課による前年度の試掘調査で、一部確認された遺構である。いびつな不定形の掘り形で、長軸約5.2m、短軸約2.7mと、南北に長い。深さは、0.1~0.2mを測り、その断面形は浅い皿状を呈する。掘り形の内部には、西端と南部以外の大半の部分で、多量の集石が認められた。長径20~50cm程度の自然円礫で、数個の花崗岩等を除けばその殆どの石材は砂岩である。

石材は乱雑に置かれているように見えるが、径40~60cm程度の円形に配しているところが数箇所確認できる。但し、その配置に規則性は見られない。石材の間からは、土師器、須恵器、青磁等の破片（第5図9、10、11）が出土している。本遺構の性格については不明な点も多いが、周辺に近年まで塚が幾つか存在したという住民の話を考え合わせると、塚の下部構造の可能性も考慮すべきであろう。

SX13・SX14 SX10の南西に隣接した小規模な集石遺構である。北西側のSX13と南東側のSX14は、いずれも、径25~45cm程度の砂岩長円礫を長径約1mの不整円形に配し、その内側に小円礫を入れた状態で検出した。北西から南東にかけて、深さ0.1mの浅い落ち込みの中に浮いた状態で、2基が並存していることから、合わせて1つの遺構として考えてもよいかもしれない。土師器片（第5図6）等が出土している。性格は不明であるが、位置関係などからSX10と関連した遺構と考えられる。

#### (5) 土坑

SK02 D-2区東端で検出した小土坑である。形状は東西に延びる長円形を呈し、規模は長径2.2m、短径1.5m、深さ0.4mを測る。埋土は淡灰褐色シルトで、その上層から土師器の坏1点（第5図7）、小皿8点以上、須恵器細片等が出土した。土師器はいずれも底部へラ切り、小皿のうち3点は完形である。13世紀頃の遺構と推定される。



第4図 集石遺構実測図 (S=1/80)

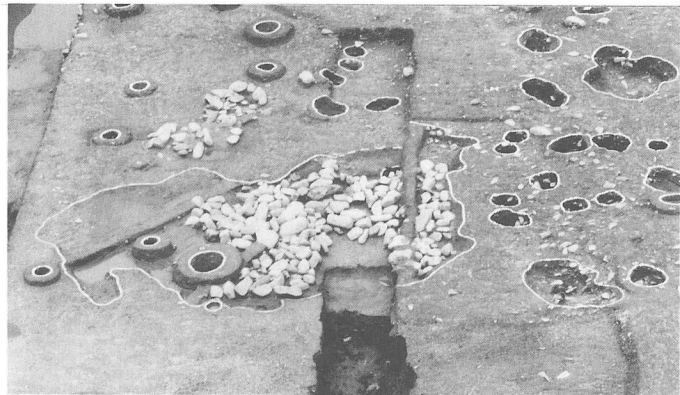
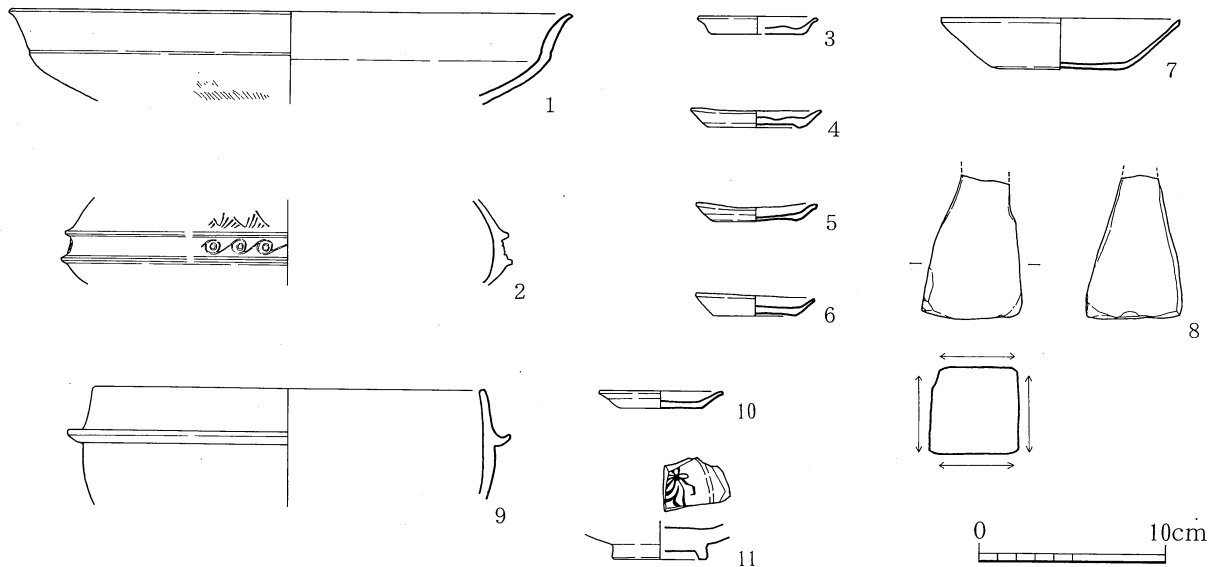


写真5 集石遺構(東から)

SX12 E-2区のSA01, SA02の交点となるピットの南に隣接する、いびつな形状の小土坑である。規模は長軸2.6m, 短軸1.75m, 深さ0.25mを測る。埋土はSK02同様淡灰褐色シルトの単層である。やはり上層から土師器坏2点, 小皿(第5図6)10点以上, 他甕・椀・須恵器坏等が破片で出土した。小皿はやはり完形品が多い。時期は, 13世紀と推定される。



- |              |                 |
|--------------|-----------------|
| 1. 2. 水田畦畔覆土 | 7. SK02         |
| 3. SB01      | 8. SA02         |
| 4. SA01      | 9. 10. 11. SX10 |
| 5. SX12      |                 |
| 6. SX13      |                 |

第5図 出土遺物実測図 (S=1/4)

### 3. まとめ

百相坂遺跡の調査においては, 概ね中世を中心とする各種遺構を検出することができた。調査区西端では弥生後期の土器が出土したが, 水田遺構に伴うという確証は得られなかった。しかし, 近隣に同時期の遺構が存在する可能性が高い。本遺跡では東側緩斜面に遺構が集中するが, 掘立柱建物2棟, 柵列2条と, 調査区が細長く面的に制約があるにせよ, 集落域としては縁辺部に位置するという感が強い。また, SB01とSX10の関係を見ると, SX10の埋没後にSB01が建てられている。両者の出土遺物に大きい時期差が認められないことから, 前者が塚であるなら, 構築後のごく早い段階で削平されたと考えることができる。

周辺での考古学的調査が殆ど行なわれていない現状の中で, 本遺跡の調査は, 古代以降における当地域の開発史等を考える上でも資料的価値を持つものである。

#### [参考文献]

高橋学 『高松平野の地形環境』

「讃岐国弘福寺領の調査—弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書」 高松市教育委員会 1992

廣瀬常雄 『香川町・船岡山古墳調査報告』 香川県教育委員会 1980

秋山忠 「古城跡を訪ねて」 「高松市の文化財第7編」 高松市教育委員会 1982

『日本城郭大系15』 新人物往来社

### Ⅲ . 小山・南谷遺跡

#### 1. 遺跡の立地と環境

本遺跡は、高松市新田町甲970-1外に所在する。本遺跡が位置する高松市新田町・高松町は、高松平野の東端に位置し、東は高松市と三木・牟礼両町との境界に位置する標高100~250m前後の山塊が南北に伸び、西は新川・春日川で、北は瀬戸内海がかって貫入していた痕跡である相引川で、また南は標高52.3mの久米山によって区切られる限定されたまとまりを持つ地域である。

久本古墳や山下廃寺が位置する南部地区は、東部山塊から派生する丘陵がせまり、傾斜が比較的急な地域である。久本古墳東側の宝池南部では標高約16m、西側の新田街道では標高約8m、その間約300mであることから、約1.5°ほどの傾斜となる。また等高線の方位は、巨視的に視ると概ね西側の新田街道と同一方向になる箇所が多い。

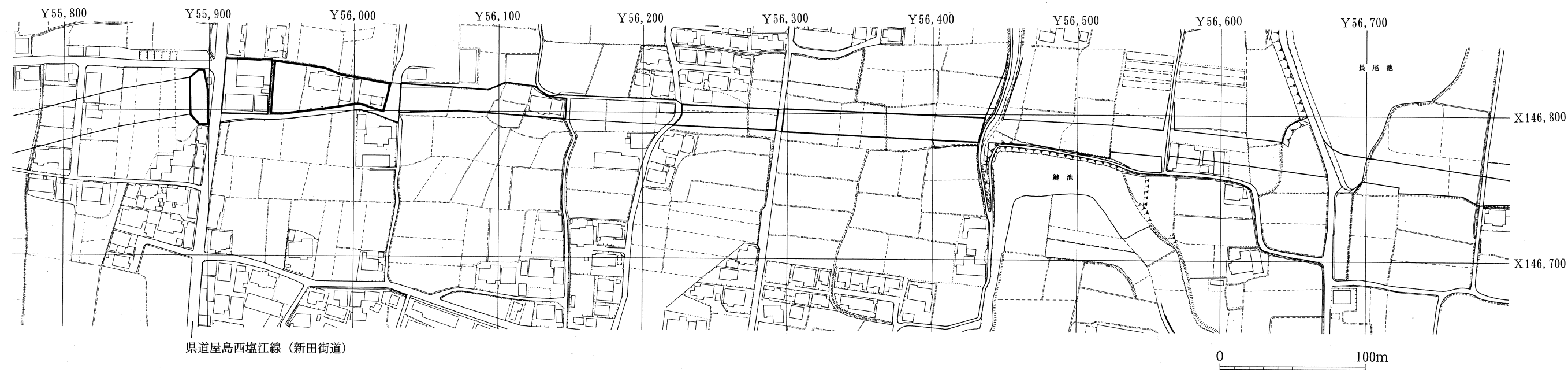
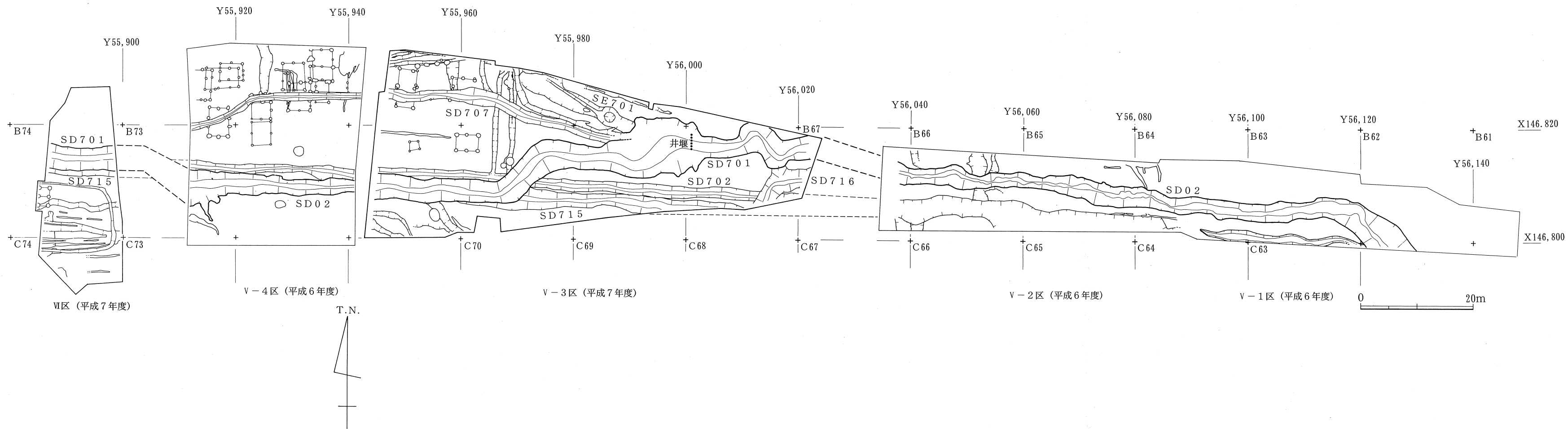
一方、小山・南谷遺跡周辺の北部地区は、東側の山塊が東方へやや後退することや南谷という谷筋が南部に位置することから、南部地区と比較すると傾斜が緩やかな区域が多い。平均的な傾斜度を見ると、東の長尾池の堤防裾が標高約16m、西側の新田街道で約6m、その間650mであることから、約0.9°を測る。北部で山裾の後退等から等高線の方位も新田街道の方位よりやや東側へ振ったものとなっている。小山・南谷遺跡の南側に東部山塊から伸びる丘陵が新田街道まで伸びており、南部地区と北部地区との地形的な境界となる。

新川以東の本遺跡周辺の主要遺跡については、第6図に掲載した。古墳時代には、県内で唯一の碧玉製鍬形石等の石製腕飾類が出土した前期前方後円墳の高松市茶臼山古墳や亀甲型陶棺を持ち、作り付けの石棚を持つ久本古墳をはじめとして山下古墳・小山古墳等の大型横穴式石室墳が分布する。また、白鳳期の瓦が出土している山下廃寺、また日本書紀天智6年の条に記載された屋島城が所在すると推定される屋島が相引川を隔てて北正面に位置する。高松町新田町域は旧山田郡に属し、県下でも畿内等と密接な関係を窺わせるが、推定南海道から離れ山田郡内でも独自のまとまりを持つ地域であることは注意すべきであろう。



- 1. 屋島城跡
- 2. 喜岡城跡
- 3. 小山・南谷遺跡
- 4. 小山古墳
- 5. 石塚古墳
- 6. 山下古墳
- 7. 山下廃寺
- 8. 久本古墳
- 9. 高松市茶臼山古墳
- 10. 宝寿寺跡
- 11. 前田東・中村遺跡
- A 弘福寺領讃岐国山田郡田図北部推定地
- B 弘福寺領讃岐国山田郡田図南部推定地

第6図 遺跡の位置と新川以東の主要遺跡



第7図 遺構配置図 (S=1/600)、調査区割図 (S=1/3,000)

## 2. 調査成果の概要

### (1) 調査区の設定

本遺跡の発掘調査が、平成5年度からの継続事業であることから、昨年度までの調査区の設定を踏襲して、調査区を設定した。当初対象の新田街道以東の地区をⅤ-3区とし、西をⅥ区とした。また地区割とは別に調査区に20mメッシュのグリッドを設定した。第7図のとおり、国家座標第Ⅳ系のXY軸と平行するラインを基準とし、新田街道東の今年度調査区中央部の東西方向基準線がB列(X:146,820.00)、調査区西部の南北方向基準線を70列(Y:55,960.00)となる。西北の交点名をグリッドの呼称とした。

高松平野の新川東岸の高松町・新田町域は、春日川・新川の氾濫源と東部山塊が迫るため傾斜地が多く、かつ平野も広くないため、高松平野中央部ほどには明確な地割り線を認めにくい地区である。そのため条里研究面では、さほど関心が持たれなかった地域である。

今年度の発掘調査成果としては、高松平野南部の安定した沖積平野部を中心として展開する山田郡・香川郡の共通条里地割りとは異なる方位を持つ条里地割の存在を確認したこと、またその初現が奈良時代にまで遡る可能性が、明らかとなったことであろう。

県教育委員会が平成5年度に実施した平成6・7年度調査対象地についての試掘調査で、東西方向の並行する2条の溝を確認し、古代の道の可能性を推察し、また県道改良予定地周辺の地割りとは異なる地割り線の存在が南部の山下廃寺周辺に認められる点を指摘した。平成6年度の発掘調査においては、試掘調査で確認した東西方向の溝を調査するとともに、それと直行する溝や対象地の東部で中世の集落跡を検出した。SD02と呼ぶ東西方向の溝は9世紀から13世紀の遺物が出土し、規模が大きくかつ直線的に400m以上続くことから、基幹的用水路であるとして、同時期に条里地割りの存在を推測した。また、昨年度調査区の間未調査地区が存在したことから、新田街道に面した西部地点と約1町離れた東部地区とでは検出した遺構の関連性について課題が残った。

平成7年度の発掘調査地点は、昨年度調査箇所隣接する。また追加調査区(Ⅵ区)は、新田街道の西側に位置する。東側調査区では、南部を東西に方位を持つ3条の規格性のある溝(SD701・702・715)と西北部で掘立柱建物群、その東側で井戸(SE701)を検出した。SD702がもっとも古く奈良時代の土器群を多量に包含し、その後、SD715、古代末中世に埋没するSD701へと移行し、規模も拡大する。SD701は、昨年度概報でのSD02に該当する。SD702とそれに続く715は、Ⅵ区～Ⅴ-2区にかけて直線的に走り、その延長は、約200mほどとなる。両溝は、西部のⅥ区ではほとんど重複し、SD702を715が切る。SD702からはB70グリッドで2条の小規模な溝が並行して分岐北上する。この2条の溝は建物群の分布の東限となる。またSD701は、建物群が分布するⅤ-3区西部・4区の間約60mだけ、あたかも建物群を迂回するかのようにならぬと流路を変え、新田街道以西は再び北側へと流路を戻す。このSD701は、SD715

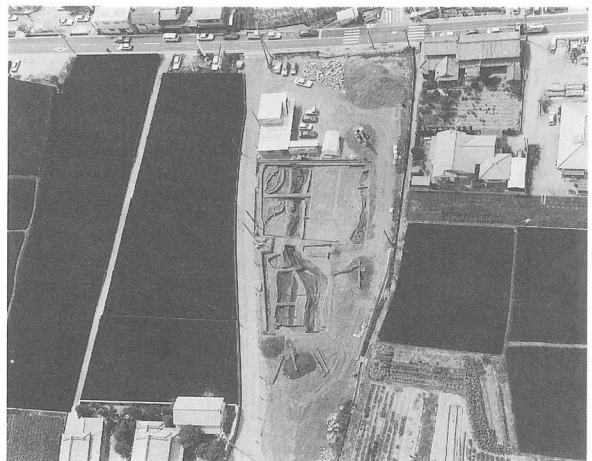


写真6 発掘区航空写真(東から)



に代表される区画基準線が、Ⅵ区やⅤ-2区のSD701ラインへ変更されたことに伴い、延長線上にある集落域を迂回したものと考えられる。

また新田街道の西側の調査区(Ⅵ区)では東側と異なり、SD701等の溝の北側は南側より一段低く、洪水砂が厚く堆積し、建物は存在しない。また、溝より南側には掘立柱建物が建つ。この掘立柱建物は、総柱建物となる可能性が高い。

Ⅴ-3区および昨年度調査のⅤ-4区の建物群については、SD702内の遺物出土量がⅤ-3区西部において特に多いことからして、その初現は奈良時代には遡るものと考えられる。もっとも明確に建物群を検出した昨年度調査区のⅤ-4区では、建物群が重複状況や位置関係から3期程度には区分することが可能であり、かつ前述のように、SD701がこれらの建物群を避けて流路が開削されていることからすれば、少なくともSD702～SD701の時期に所属すると考えられる。またこのⅤ-3・4区の建物に総柱の建物が認められないことからすれば、居住空間と倉庫群が新田街道を境として分離していた可能性もある。

また、井戸(SE701)は、上位を奈良時代の遺物包含層に覆われ、斎串・金環、井戸廃絶に伴う祭祀に用いられたと考えられるマダコ壺状の粗製土師器壺の完形品が出土し、井戸から伸びる溝からは、銅製儀鏡(面径1寸2分)が出土した。これらの遺物は、この集落だけではなくこの集落が含まれる高松町・新田町北東部に限定して展開する小範囲の条里地割の性格を示す重要な遺物であろう。

## (2) 主要な遺構

### ① 溝

SD702 他の遺構と比較的重複の少ない箇所では、幅2m・深さ1m前後を計る。西部のⅥ区ではSD715に切られ、わずかに壁面にその埋土の一部と考えられる土層が残存するだけであるが、Ⅴ-3区東端からⅥ区にかけて一直線に走る溝である。調査区の東部でやや蛇行するSD701とは対照的な溝で、全く蛇行していない。蛇行が認められないことから、溝の開削から埋没までの継続期間は短いことも考えられる。埋土は砂層をあまり含まず、黒褐色の砂混じりシルトが堆積している。遺物の出土はⅤ-3区西部に集中する。また、B71グリッド中央部で北へ2条の小規模な支溝がSD702に直行し、並行に伸びる。この2条の溝から東

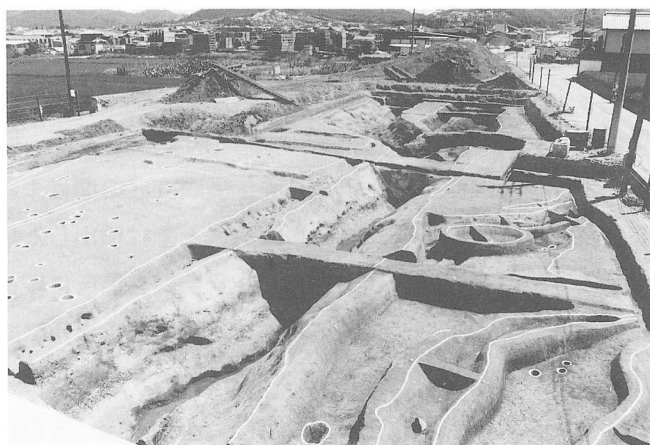


写真7 SD701・702(西から)



写真8 SD701・702土層(南東から)

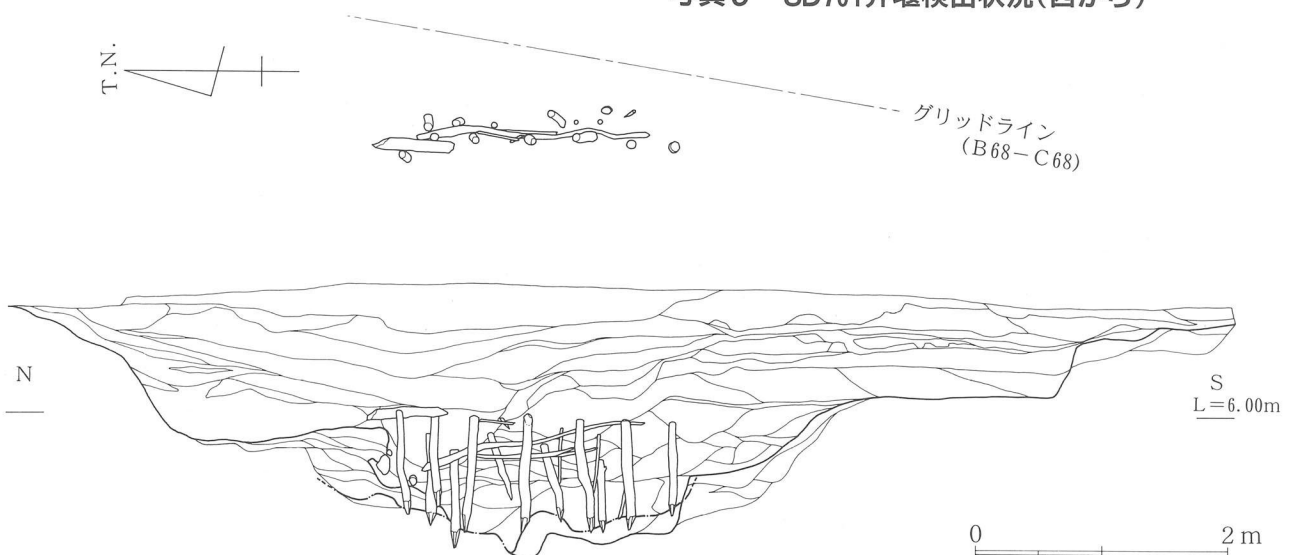
側は建物が分布せず集落内の建物域の東限を画する溝であり、同時併存の可能性が高い。SD702は、昨年度調査区のV-4区ではSD701の北側に切られながら並行して走る。また東側のV-2区でも直線的にわずかにSD715と重複しながら伸びるものと考えられる。昨年度を含めた調査区内での総延長は、200mを越える。なお、V-3区東端部は、新田街道から約1町の地点であるが、SD702は、南西から東へ湾曲して流れるSD716に切られているため、残存状況は良くないが、同時併存南北溝の調査区内での存在の可能性は溝の形状等からほとんどない。

SD715 SD701同様、直線的に東西に伸びる溝で、幅2.5~4m・深さ1.5m前後を計る。SD702とはわずかに方向を異にし、調査区の西端のVI区ではSD702を切り大半が重複する。埋土は黒色ないし黒灰色シルトを基調とし、部分的に埋土中に砂層がたまる。またSD702との重複部ではSD715の肩となったSD702が崩壊して堆積した土層が認められる。出土遺物は、集落域と近接する箇所の大半でSD701と重複し、切られることから量的にはさほど多くない。またSD702からの混入もあり、SD715の機能期の遺物の特定はやや困難である。時期的には遺構の切り合い関係からSD702より新しく、SD701よりは先行する溝である。V-3区東端でSD716に切られる。SD715の本体は南の道路下になり、確認ができない箇所が多いが、調査区東南端でのトレンチ確認では、V-3区と2区の境界の南北道に面する箇所までは、SD715の埋土が続くことから、昨年度調査のV-2区においてもSD702と並行して走っていたと考えられ、総延長は200mを越える。またV-3区東端でのSD715と同時併存する直行方向の溝は認められない。

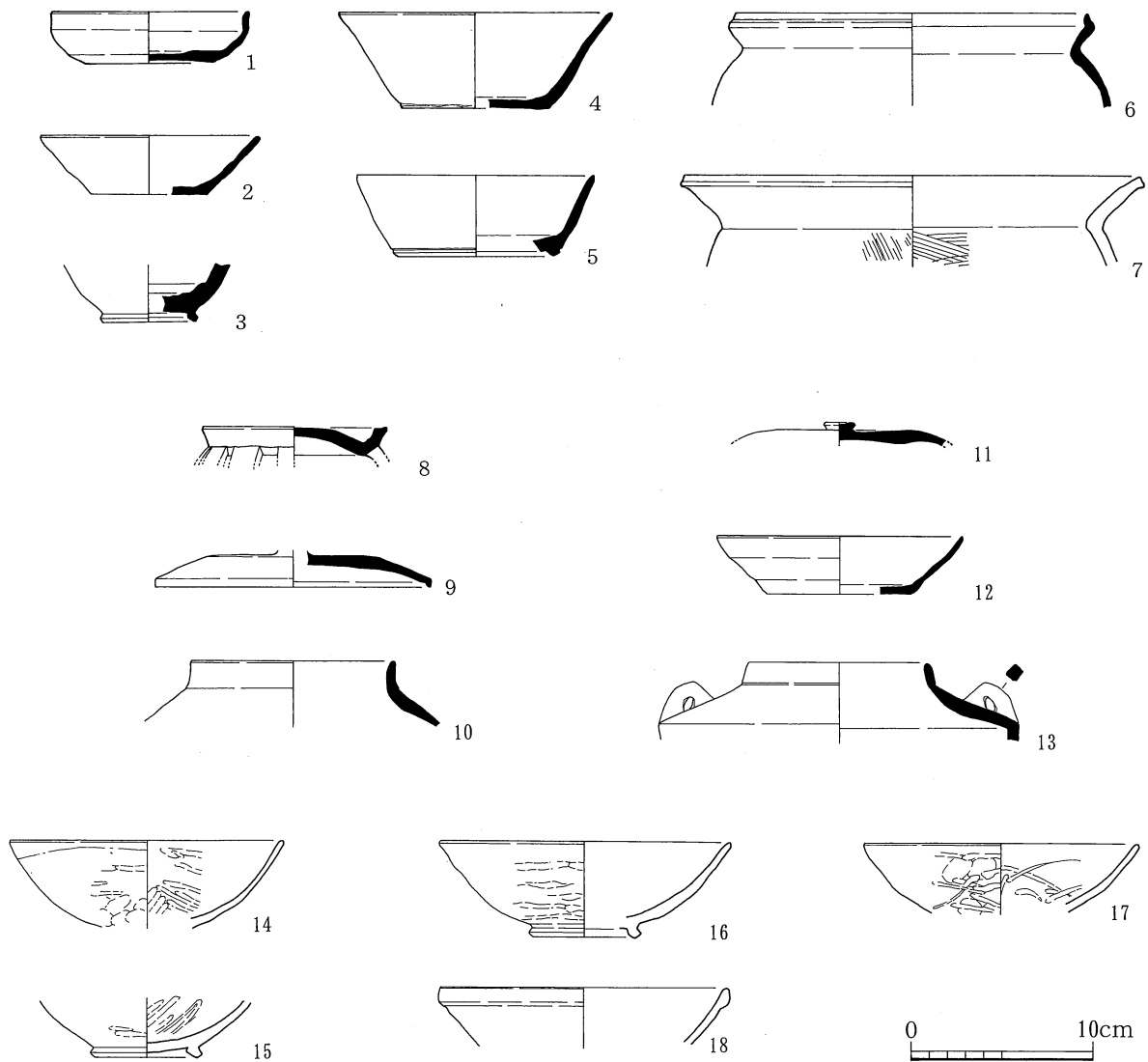
SD701 本遺跡で検出した東西方向(N-95°-E)の方位を有する大



写真9 SD701井堰検出状況(西から)



第8図 SD701井堰実測図 (S=1/60)



1. ~7. SD702 (1. ~6. 須恵器、7. 土師器)  
 8. ~10. SD715下層 (須恵器)  
 11. ~13. SD707 (須恵器)  
 14. ~18. SD701 (14. 15. 黒色土器A類、16. 土師器、17. 瓦器、18. 白磁)

### 第9図 溝出土土器実測図 (S=1/4)

規模溝 (SD702・715・701) の中で、最も後出する時期の溝で、V-3区中央西よりの箇所  
 SD702・715を切る。最終堆積層から和泉産の瓦器が出土している。他の溝と比較して規模は  
 大きい。平均的な断面形は上部が開いた「U」字型を呈し、直線的に伸びる箇所では、幅4~5m・  
 深さ2mほどを計り、溝底の断面形はきれいな半円形を呈し、浸食による形状の変形はほとんど  
 認められない。当初の掘削時からの形状が残るものと考えられる。この溝の堆積は、粗砂・中砂  
 の堆積が顕著で、最終埋没層も砂層である。

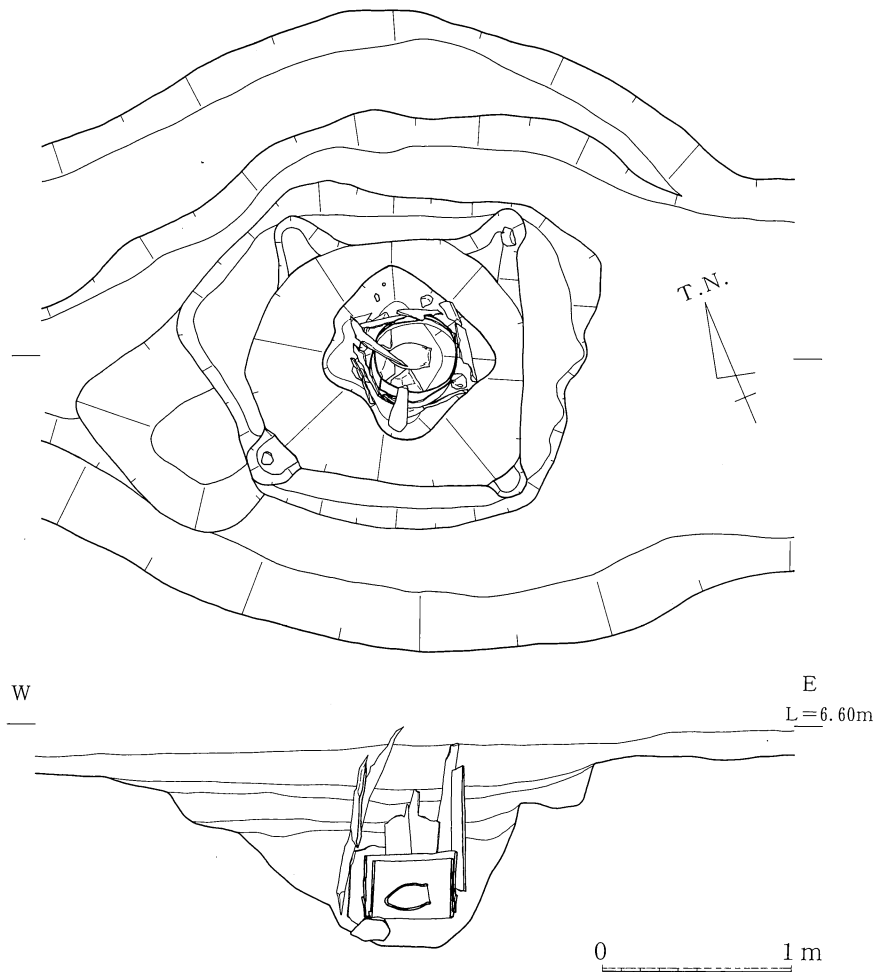
V-4区と3区西部では、SD701は、溝の北岸の掘立柱建物群を避け、新田街道までの間約  
 60mについては、6~7m南にずれて直線的に西進し、新田街道以西では再度北へ流路を戻す。  
 またV-3区東端部では、SD701の流路が乱れるが、新田街道から、ほぼ1町の地点に相当し、  
 先後関係からSD701の最終埋没期より前の時期において同時併存の可能性のあるSD716 (下層

部) が3区と2区の境界にある私道部分において合流することが予測され、溝の合流・分岐が蛇行の原因の一つと考えられる。なおSD716は、出土遺物が少なく、時期の特定にやや難があるが、SD715よりは新しく、SD701の最上層の砂層には切られている。この溝は、概ね山下廃寺西側の地割線より、2町西のライン上に位置する点は注目される。

また、その西部でSD701は井堰が設けられており、ダムアップされSD707へ分水する。井堰は、最上層の砂層の下位から打ち込まれており、直径5cmほどの枝打ちした丸木が50cmほどの間隔で溝と直行して南北に2列に並び、その間に横方向に細枝を渡す簡単な構造で、その隙間を茅状の植物で目詰めを行っている。この井堰の上流側から分水した水路がSD707である。このSD707は、SD701との重複部分では、SD701の黒色シルト～粘土が南側の溝の肩となっている。そのことから、この分水はSD701の開削初期からではなく、途中の段階からであり、SD707がV-3・4区の建物群の中を建物を切って走る事から、集落の構造やその所属時期を検討する上で、参考になる事象である。

② 井戸

SE701 上面幅6.9m・深さ2.8mを計る。南東から北西方向へ伸びるごく浅い自然流路の埋没後の箇所にかまれた井戸で、概ね2段に掘り込まれている。1段目の方形掘形の四隅に柱の痕跡があり、覆い屋があったことが窺われる。内部構造は曲げ物を2重に配置し、その外側を四隅



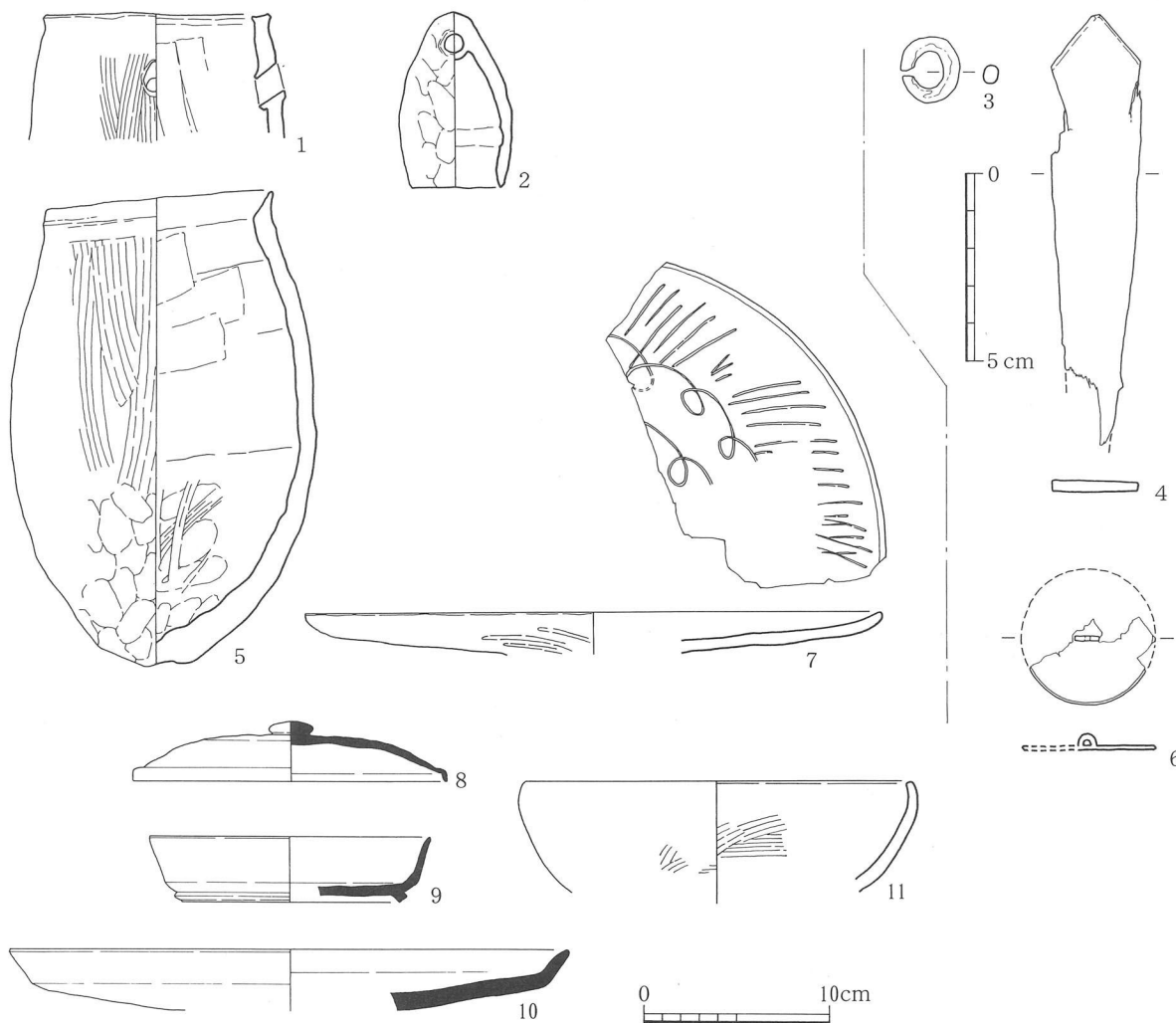
第10図 井戸 (SE701) 実測図 (S=1/40)

に支柱を持ちその間を縦方向に板で方形に囲んでいる。外部曲げ物は、内部の物と比較してして風化が著しい。

出土遺物としては井戸枠外の掘形内から、イイダコ壺・マダコ壺・金環・斎串が出土している。また井戸内からは、廃絶に伴う祭祀土器と考えられる粗製の土師器壺の完形品が出土しており、土師器壺は体部下半部と上半部では成形技法が異なり、枠外出土のマダコ壺のように口縁直下に穿孔も認めら



写真10 SE701検出状況(南から)



1. ~4. 7. SE701井戸枠外掘形内 (1. 2. 7. 土師器、3. 金環、4. 斎串)  
 5. SE701井戸曲げ物内 (土師器)  
 6. SE701排水構内 (青銅製素文鏡)  
 8. ~11. SE701被覆土 (8. ~10. 須恵器、11. 土師器)

第11図 井戸 (SE701) 他出土遺物実測図 (S=1/2・1/4)

れない。また出土時点ではツルベ的な機能を想定し得るような縄等の残存物の付着は全く認められなかった。井戸埋没後の被覆層の出土遺物からこの井戸の下限は奈良時代である。

また、井戸から伸びる排水溝の埋土中から、直径3.6cm、厚さ1mmほどの無文の小型銅製儀鏡が出土している。井戸の廃絶期の祭祀に伴うものであろう。

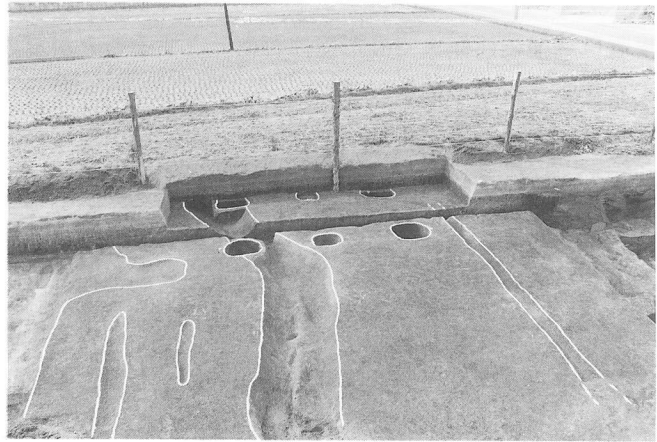


写真11 VI区総柱建物(東から)

### ③ 掘立柱建物

V-3区西北部とVI区南部で検出した。SD702から直角に分岐する2条の溝を建物群の分布の東限とする。黒色ベースに黒色土の埋土を持つ柱穴であることから確認が困難であった。1×2間の掘立柱建物等を確認している。A71グリッド北端の柱穴列は、4穴が他の基準軸とは異なった方位で伸びる。建物となるかどうかは不明確であるが、柱穴規模は大きく調査区外北側に伸びる可能性が考えられる。出土遺物が少なく時期を特定し得ないが、他の建物・溝と方位が異なるため、古墳時代以前の時期の所産の可能性もある。

VI区で検出した掘立柱建物は、西側の柱穴列が浅くまた小規模のものであることから束柱と考えられ、西側の調査区外へ伸びる総柱建物と考えられる。

## 3. まとめ

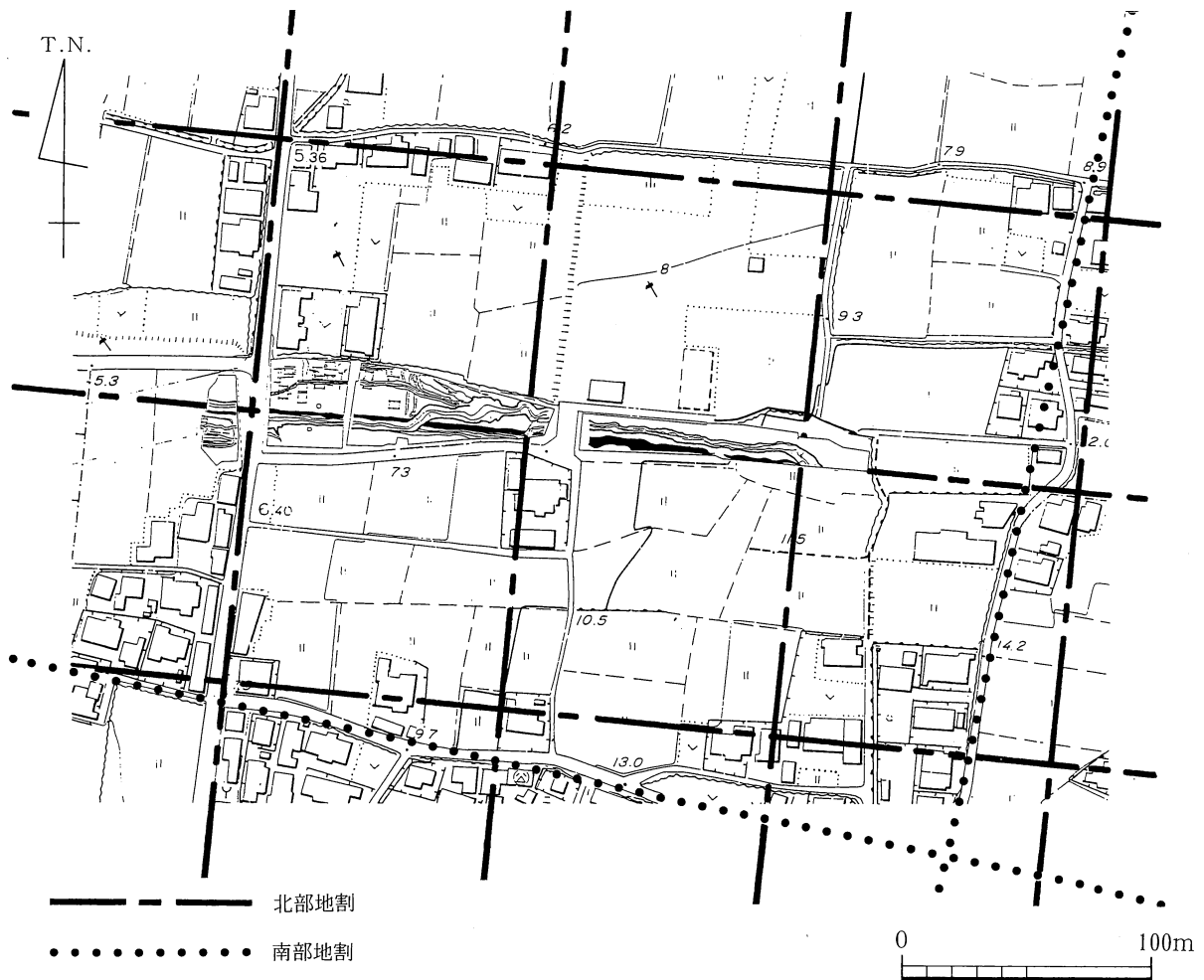
本遺跡が所在する新田町・高松町の現存地割は、高松平野中央部の山田郡・香川郡の広域で明確な統一的な地割（東西方向の里界線が一致）とは様相が異なり、地割りの規則性に欠ける地域である印象を受ける。これは、この地域が、限定された狭いエリアであること、東部山塊のせまる傾斜地で、小規模な埋没谷が多く認められること、また、市道や幹線水路の規格性が希薄なことがその理由としてあげられよう。

本遺跡で検出した東西方向の基幹水路とそれに直行する県道塩江屋島西線（新田街道）を基準として、高松市都市計画図（1/2,500）をもとに、この地域の条里地割りの復元を試みたのが第12・13図である。新田街道を南北方向の基準としたのは、新田街道の東西で本遺跡の遺構の様相が異なり、SD701の流路方向が異なることからである。その結果、西は新田街道より1町西のライン、東は長尾池の裾周辺まで、南は遺跡より約1町南あたり、北は新田街道に面するかた本池から2町ほど北までの範囲において、概ね1町方面にのる径溝や水田区画線が分布する。この範囲は、南の低平丘陵・東は山裾の傾斜地の縁辺、西は新川氾濫源・北は海に面した低地で限られる地形的なまとまりが窺われる。また、地割り線と一致する鍵池・かた本池等のため池は、地割りに基づいて築かれた池であろう。ため池と地割り基準線の一致は高松平野・丸亀平野などでよく見られる現象である。平成5年度・6年度の小山・南谷遺跡の発掘調査は東側の新池周辺まで実施しており、この中でこの地割り線に影響を受けた溝等の分布は、鍵池の西側までが顕著であり、それ以东は時期的にも弥生時代後期以前の時期が大半を占める。小山・南谷遺跡の発掘調査が東西方向の線上の調査であり、その他の平野域の

調査がまだ実施例のないことから、不明確な箇所も多いが、現時点では、初期の当該地割り分布域の東限は鍵池の西側までの可能性が高いとすることができよう。この地割りは、概ね1里四方の分布域を有することが予測される。

また、新田町・高松町の南部地域には、山田郡条里と条界線の方位を一致する地割り（南部地割）の存在が認められ、山田郡の3条と4条の条界から2町東側の坪界線と一致する地割り線が山下廃寺の西側を南北に走る。この地割りは東西方向の地割り線を伴う。両地割りは、それぞれの主要分布域の縁辺において一部重複が認められる。水利条件や当時のそれぞれの造営主体の勢力の消長等がその理由として予想されるが、現状ではその解明については資料的に限界がある。

この中で、今回の発掘調査でその糸口があると考えられるのは、条里地割り造営主体については、本遺跡S E 701及びその排水路から出土した金環・銅製儀鏡・斎串・祭祀用壺等の中央との強い結びつきを示す遺物があり、また条里の重複の時期については、南部地割との関係が考えられるSD 716の時期が平安時代以降と考えられる点である。またこうした地割りの影響により、新田町・高松町の北部地割りの基準がSD 702・715からSD 701へと変化したことを窺わせる。



第12図 遺構と周辺地割との関係



第13図 新田町・高松町条理地割図

[参考文献]

- 『讃岐国弘福寺領の調査—弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』 高松市教育委員会 1992.3
- 『小山・南谷遺跡 平成5年度』 「県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」  
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1994.3
- 『小山・南谷遺跡』 「県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成6年度」  
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1995.3



## IV . 八丁地遺跡

### 1. 位置と基本層序

八丁地遺跡は、立石山・雲附山などを擁する山系の標高209mのピークより北に派生する舌状の丘陵裾の東緩斜面に位置する。遺跡の西端はこの丘陵によって画され、また東端は中小河川の玉浦川によって画される。遺跡の南北方向への拡がりは不明である。この玉浦川は、雲附山周辺の山麓に源を発し、北流して八丁地付近より地表面を大きく開析して小刻みに蛇行しながら志度湾に注ぐ。

さて遺跡の立地する周辺は、1/25000土地条件図「高松南部」によると、「台地・段丘」の下位面<sup>(1)</sup>に分類されている。また寺戸恒夫は、これとは別に「谷底平野」として周辺域を区分している<sup>(2)</sup>。両者の相違がどのような要因によって生じたのかは、不明である。また一方寺戸は、八丁地周辺に「小規模ながらも3段の段丘が認められる」ことを示摘されている。遺跡に立って周囲を眺めれば、比高0.5~1.0m内外の小崖が連続しているのが随所に認められ、またそれが玉浦川の下刻によって生じたものであることも容易に理解される。なおこの3段の段丘は上から順に、昨年度調査区のⅡ~Ⅳ区（段丘Ⅰ面）、Ⅴ・Ⅵ区の西部（段丘Ⅱ面）、Ⅵ区の東端部（段丘Ⅲ面）にそれぞれ相当するものと思われる。各段丘面によって、検出された遺構の時期・内容が非常に異なったものとなることは、昨年度の概報に詳しいので省略する。なおⅠ区は、丘陵裾の傾斜変換点付近を削平によって平地化した場所であり、明確な遺構は検出されていない。

今年度調査区のⅦ区は、Ⅳ区とⅤ区に挟まれた東西約45m、南北約15m、面積165m<sup>2</sup>のトレンチ状の狭長な調査区である。したがって本調査区での調査は、種々の制約を大きく受けるものであった。なお本調査区は、調査着手時には荒地の状態であったが、かつては宅地として利用されていたらしく周囲の田畑より一段高く、現地表面の標高は15.70mである。以下、本調査区の土層序を説明する。

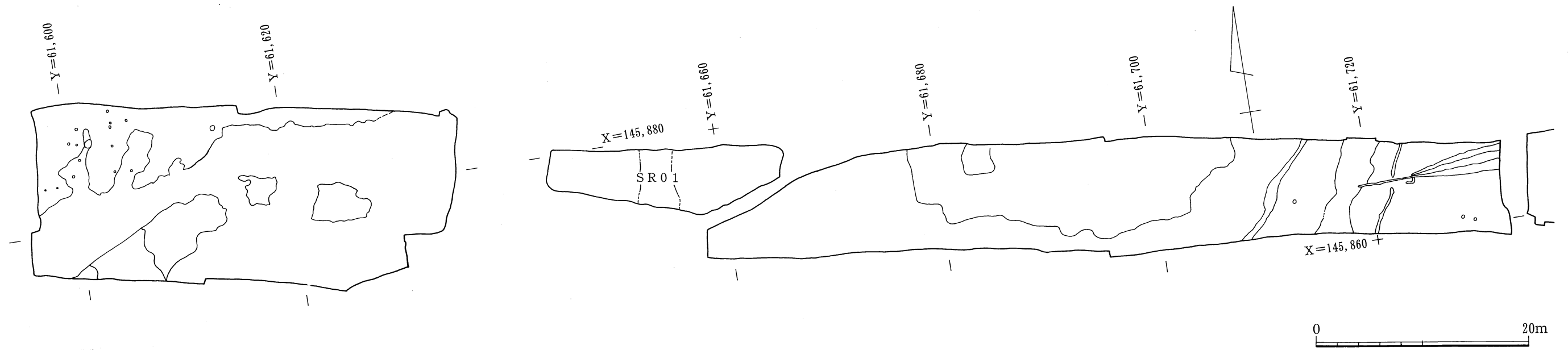
現地表下0.5~0.6mには、宅地整地時の盛土および旧耕作土層がある。この旧耕作土層以下が、中世以前の遺物包含層となる。まず上位には、7層に細分される褐色系粘質シルト・粘土と粗砂層が、0.4~0.7mの層厚で東に傾斜して堆積する。各層下面は一部を除いて概ね平坦であるが、本層最下位の黒褐色粗砂混じり粘土層下面は、顕著に凹凸が認められた。これらの凹凸に規則性はなく、平面的には小ピット状を呈しており、水流による攪拌の可能性を示唆するものといえる。本層か



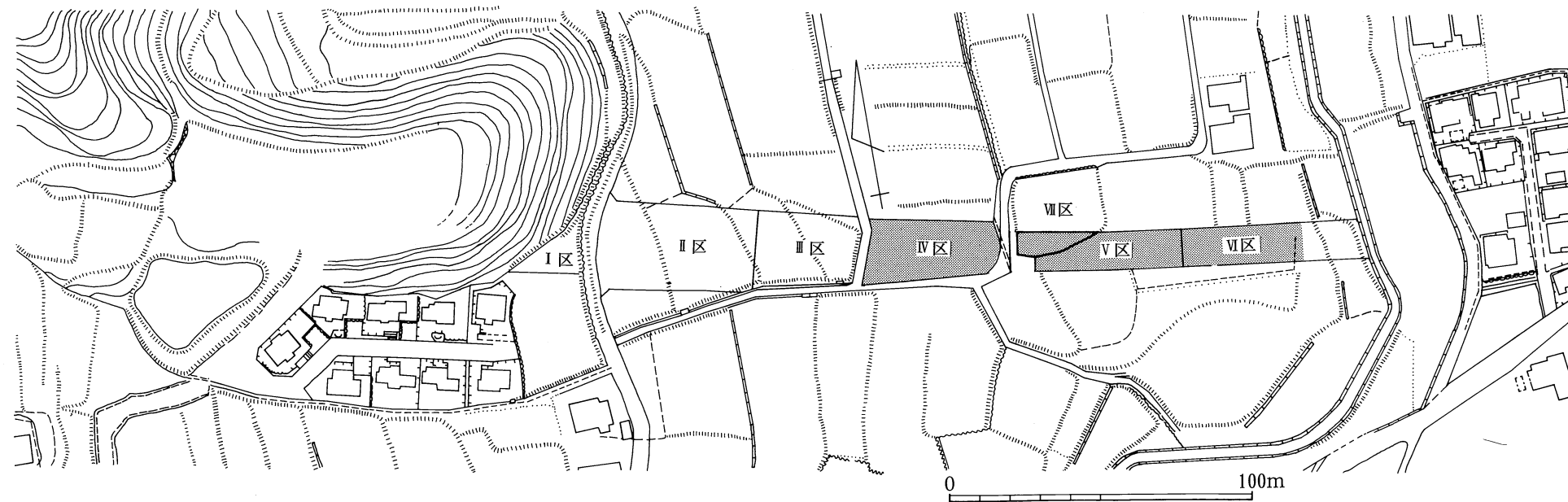
写真12 調査区全景(東から)



写真13 調査区北壁土層(南から)



第14図 IV～VII 区遺構配置図 (S=1/400)



第15図 調査区割図 (スクリーントーンは第14図 図示範囲)

らは、古代末から中世の遺物を微量採集している。本層は昨年度の調査成果によると、Ⅳ区自然河川とされる遺構の埋土に相当すると考えられるが、調査区全域で本層が検出されたことにより、包含層という以上は判断できなかった。本層下位には、黒色砂混じり粘土層が、0.1～0.3mの層厚で東に僅かに傾斜して堆積し、古墳時代前期の遺物を微量出土する。この古墳時代前期の包含層下面が弥生時代後期の遺構面となり、流路SR01が北流する。弥生時代後期の遺構面は、緩やかに東に傾斜して検出され、その比高差は調査区西端と東端で約0.3mを有する。この遺構面の下位は、灰色系中～粗砂を主体とする厚い砂の堆積層となり、その間に灰色粘土の薄層が介在する。この砂層は調査区内で2.5m以上の堆積が認められ、顕著にローリングを受けた縄文時代後～晩期の土器が出土した。この砂層の堆積は、試掘調査の成果などからⅣ区以東の広い範囲において確認されており、遺跡東側を北流する玉浦川の旧流路に伴う堆積層と推定される。しかしながら、昨年度の調査が局部的な調査に留まり堆積状況の確認が不十分だったため、詳細については知り得なかった。

註

- (1) 25,000分の1土地条件図「高松南部」 国土地理院 1986
- (2) 寺戸恒夫 「志度町の自然環境」 『大学と地域 -大学まち「志度町」の変貌-』 徳島文理大学文学部コミュニケーション学科 1995

## 2. 調査成果の概要

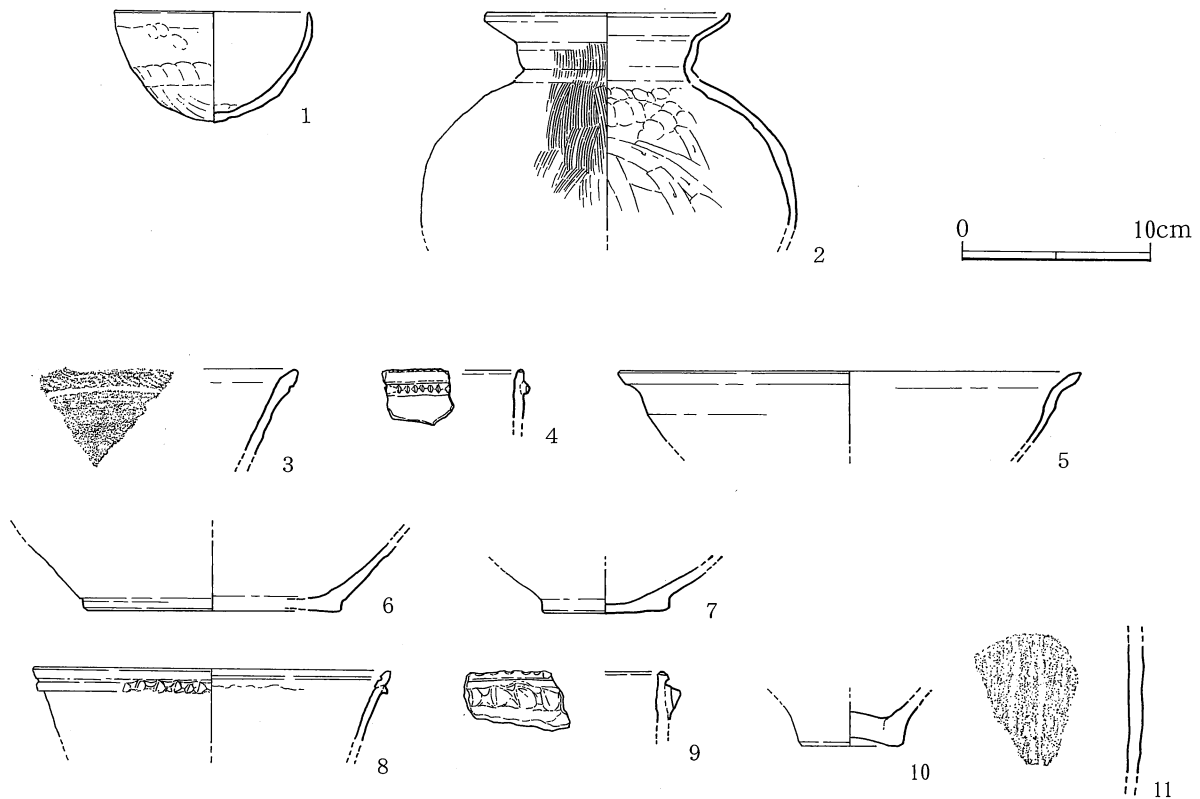
Ⅶ区の調査によって確認された遺構は、弥生時代後期の流路のみであった。以下、遺構の概要および縄文時代の出土遺物について報告する。

SR01は、Ⅶ区ほぼ中央で検出された流路である。幅2.8m、深さ0.5mで、ほぼ直線状に真北に流れ、断面形は概ねU字状を呈する。埋土は2層に分層された。上層は灰色砂混じり粘土と浅黄橙色粗砂の互層で、流路両岸に広くオーバーフローして堆積し、薄い包含層を形成する。流路中央部上層下位より、流木などの自然遺物とともに、土器(1・2)が出土した。鉢は、内型成形の可能性が考えられる。壺は、内弯して立ち上がる頸部に外上方に小さく開く口縁部を有し、口縁端部は上方につまみ上げる。体部は上半部しか出土していないが、球形を呈する。下層は、暗灰色砂混じり粘土で植物遺体を含む。遺物は土器細片が微量出土したにすぎない。

縄文時代の遺物は、上述したように弥生時代後期の遺構面のベースとなる、灰色系砂層中より出土した。この砂層は、堆積状況から上下2層に大別され、遺物は両層より出土した。いずれもローリングを顕著に受けており、器表調整の観察が困難なものが多い。遺物は大半が土器で、そのほかにサヌカイト剥片が2点出土した。突帯文土器は、幅狭のもの(4・8)と幅広のもの(9)の2種があり、後者には口縁端部に刻み目を有する。底部は、平底状を呈するもの(6・7)と、凹み底のもの(10)の2者がある。前者の体部は大きく開く形態をとる。

## 3. まとめ

以上述べてきたように、今年度はわずか165㎡という限られた範囲での調査であったが、いくつか新しい知見をもたらし、八丁地遺跡の具体像をより明らかにした点で大きな意義のあるものであった。また上述した遺跡周辺の地形環境の成因を復元する上で、重要な資料を提供するものであった。



第16図 出土遺物実測図 (S=1/4)

番号	遺構名	種別・器種	法量(cm)	胎土	色調	調整技法等
1	SR01上層	弥生土器・鉢	(口)10.5 (高)5.85	密, 0.1~0.3mmの石英・カクセン石・雲母含む	灰黄褐色	外面, ユビオサエ・ナデ 内面, 丁寧なナデ
2	SR01上層	弥生土器・壺	(口)12.9	密, 0.1~6.0mmの石英含む	にぶい黄橙色	体部外面, タテハケ 体部内面, ユビオサエの後ヘラ削り
3	包含層	縄文土器・深鉢	-	粗, 0.1~3.0mm石英多量に含む	オリーブ黒色	口縁部外面, 右下がり縄文+沈線 体部外面, ヨコ方向ナデ
4	包含層	縄文土器	-	やや粗, 0.1~2.0mm石英・金雲母含む	明黄褐色	口縁端部, 刻目 口縁部外面, 刻目突帯 内面, ヨコ方向のヘラミガキ?
5	包含層	縄文土器・浅鉢	(口)24.4	粗, 0.1~5.0mm石英含む	明黄褐色	内外面, マナツ
6	包含層	縄文土器・底部	(底)13.3	密, 0.1~1.0mmの石英・雲母含む	褐灰色	体部外面, ヨコ方向ナデ?
7	包含層	縄文土器・底部	(底)6.6	粗, 0.1~3.0mmの石英・長石多量に含む	明褐色	内外面, マナツ
8	包含層	縄文土器・深鉢	(口)18.8	やや粗, 0.1~2.0mmの石英含む	黒褐色	口縁部外面, 刻目突帯・媒付着 口縁部内面, 沈線+ヨコ方向ナデ
9	包含層	縄文土器	-	粗, 0.1~5.0mmの石英多量に含む	にぶい黄色	口縁端部, 刻目 口縁部外面, 刻目突帯
10	包含層	縄文土器・底部	(底)5.2	粗, 0.1~5.0mmの石英・赤色粒多量に含む	にぶい橙色	内外面, マナツ
11	包含層	縄文土器・体部	-	粗, 0.1~3.0mmの石英多量に含む	灰黄褐色	外面, タテ・ナナム方向の条痕 内面, ヨコ方向のナデ

第1表 出土遺物観察表

まず弥生時代後期の流路の調査は、昨年度までⅡ・Ⅲ区に限られていた当該期の遺構の分布が、より下位の段丘面にも及ぶことが明らかになった点で、興味深いものがある。当該期の集落域は、上位の段丘面上が想定されようが、下位の段丘面の土地利用状況の復元を行なう上で、重要な資料を提供した。

また縄文時代後～晩期の遺物が出土した砂層は、玉浦川の旧流路に伴う洪水堆積の可能性を示唆するもので、当遺跡周辺に当該期の集落の存在を暗示させるものであった。しかしながら掘削深度が3mを越え、調査区壁面の崩落の危険性が想定されたため、砂層を完掘することができなかった。したがってこの砂層の下面に当該期の遺構やあるいはそれ以前の遺構・遺物が発見される可能性が考えられたが、それを究明することはできず、今後の課題として残された。なおこの砂層の分布範囲は、段丘Ⅱ面に限られるようであり、段丘Ⅰ面の形成時期がそれ以前に遡ることを、また段丘Ⅲ面のそれがそれ以後に下ることをそれぞれ示している。各段丘面の詳細な形成時期については、本報告作成時において検討したい。

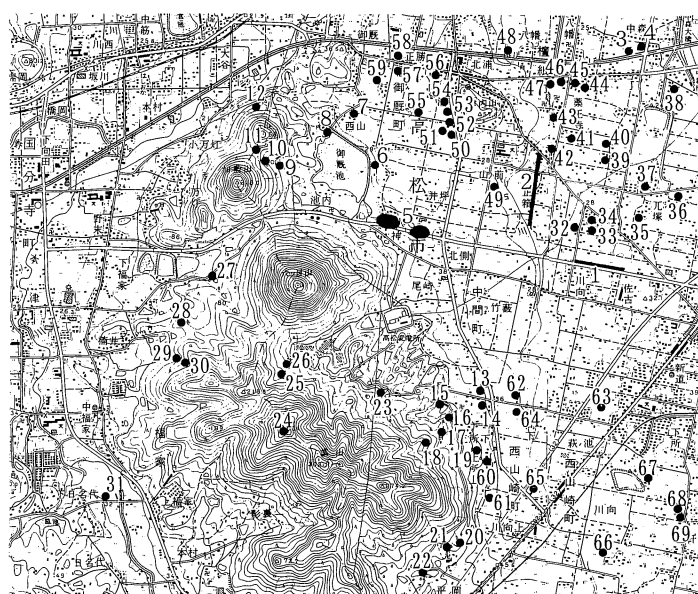
# V. 兀塚遺跡

## 1. 遺跡の立地と環境

高松平野は、香川県のほぼ中央部に位置する東西約11km、南北約10kmの平野である。西を五色台・六ツ目山など、東を立石山・雲附山・五瀬山など、南を上佐山などの山塊が取り囲み、北は瀬戸内海が開ける。兀塚遺跡は、この高松平野の西辺部にあたる高松市檀紙町兀塚と円座町佐古・川向にまたがって所在する。調査地の西側には、檀紙地区内で農業灌漑用水として利用されている中小河川の古川が、蛇行しながら北に向かって流下している。また、その西方には堂山・六ツ目山・伽藍山などの山塊があり、東方には2級河川の香東川が北流し、さらにその東側には高松平野の中心部が広がっている。遺跡周辺は、閑静な田園地帯が広がり多数のため池が点在する。遺跡周辺の標高は約30m前後であり、地表面には若干の起伏が認められる。この凹地部分を除いて、当該地域には一町方格の条理型地割が残存する。なお「兀塚」という地名の由来については、付近を開拓した時あるいは付近を流れている川が氾濫した時に生じた砂礫を所々に盛り上げた塚が多くあったからではないかという説と、源平屋島の合戦の時に敗れた落人の塚に草木が生えなかったためではないかという説などが言い伝えられている。

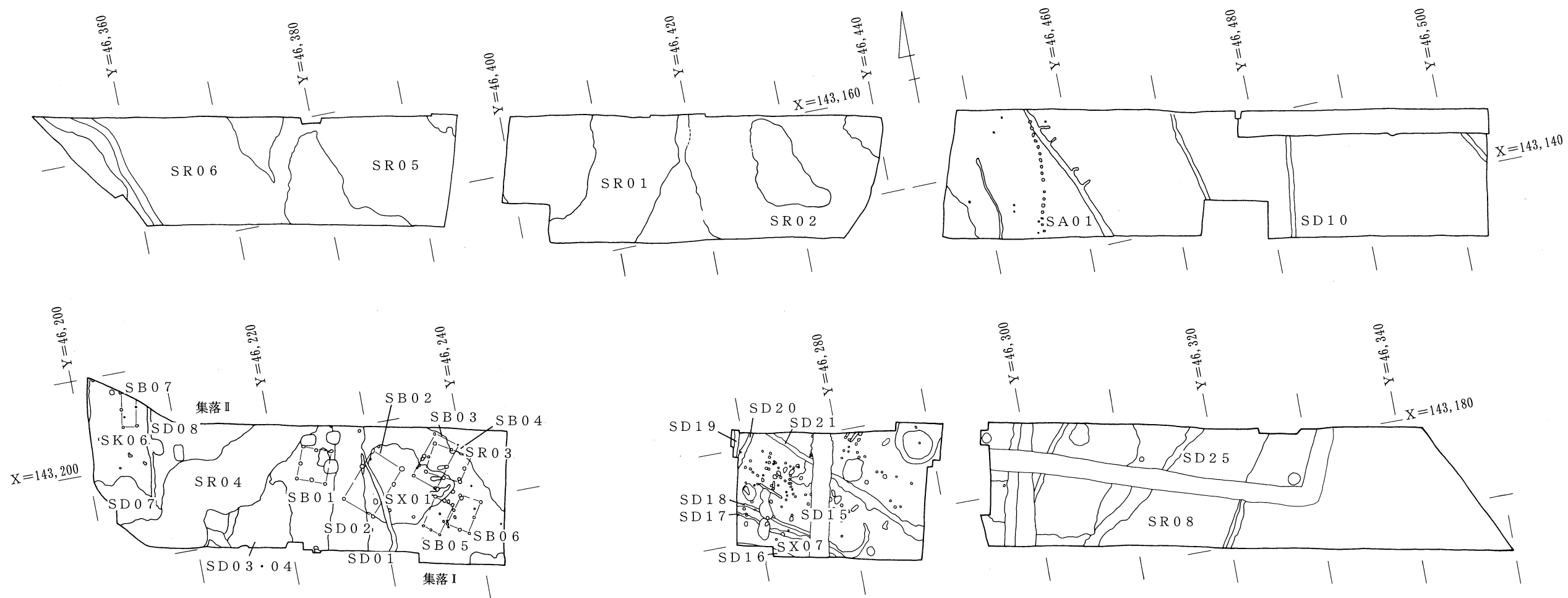
本遺跡の周辺には、おもに旧石器時代から近世に至る幅広い時代の遺跡が存在しており、特に南西部の山麓及び丘陵地から微高地部にかけて集中している。

旧石器時代の遺跡としては、正箱遺跡や中間西井坪遺跡などがある。中間西井坪遺跡は、標高317mの六ツ目山北東麓の緩斜面上に位置する遺跡である。A T火山灰層の上位から、舟底形石器と小型ナイフ形石器を主体とする良好なブロックを検出している。縄文時代の遺跡としては、六ツ目山の西斜面に位置する国分寺六ツ目遺跡の調査で、約60点の大型剥片が折り重なるように出土したサヌカイト集積遺構が検出されており、石器製作跡と考えられている。弥生時代になると遺跡数は増加し、国分寺下日名代遺跡、中間西井坪遺跡、正箱遺跡などで遺構・遺物が出土している。正箱遺跡では、後

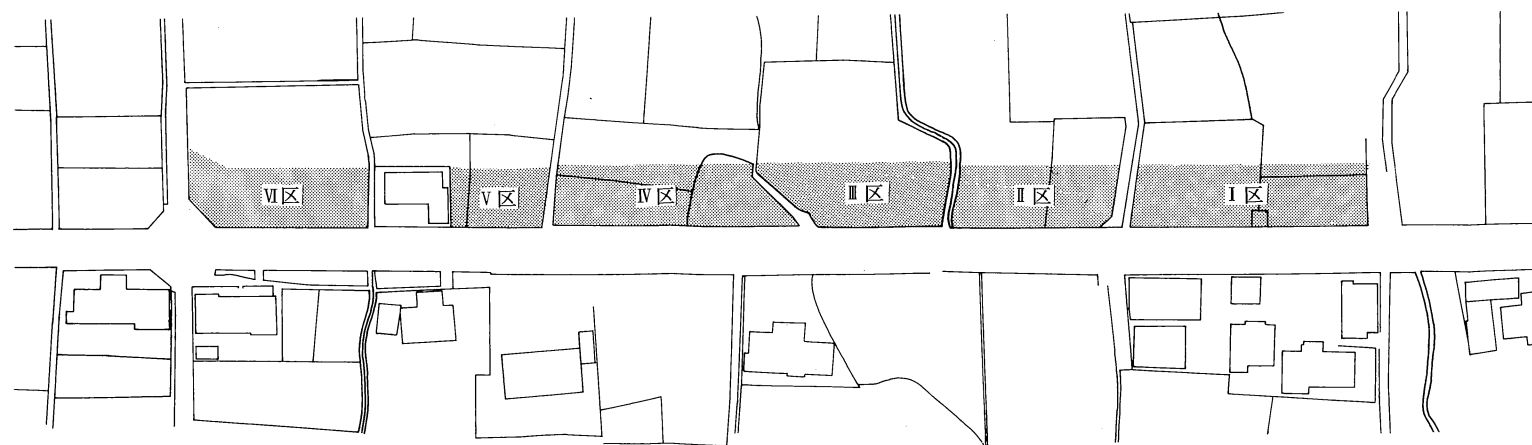
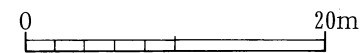


- |             |               |
|-------------|---------------|
| 1. 兀塚遺跡     | 17. 西山崎三号墳    |
| 2. 正箱薬王寺遺跡  | 18. 西山崎四号墳    |
| 3. 中森二号墳跡   | 19. 北岡城跡      |
| 4. 中森古墳跡    | 20. 本堯寺北一号墳   |
| 5. 中間西井坪遺跡  | 21. 本堯寺北二号墳   |
| 6. 三つ塚古墳    | 22. 本堯寺西古墳    |
| 7. 御厩天神社古墳  | 23. 弓塚下古墳     |
| 8. 御厩池古墳    | 24. 堂山城跡      |
| 9. 山王神社古墳跡  | 25. 矢塚南古墳     |
| 10. 伽藍山東麓古墳 | 26. 矢塚北古墳     |
| 11. うたい塚古墳  | 27. 国分寺六ツ目遺跡  |
| 12. 万灯塚一号墳  | 28. 国分寺六ツ目古墳  |
| 13. 馬塚      | 29. 国分寺楠井遺跡   |
| 14. 犬のくそ塚   | 30. おま泉遺跡     |
| 15. 西山崎一号墳  | 31. 国分寺下日名代遺跡 |
| 16. 西山崎二号墳  | 32~69. 塚      |

第17図 周辺の主な遺跡（国土地理院地形図1/25,000「高松南部」・「白峰山」を使用）



第18図 遺構配置図 (上段=Ⅰ～Ⅲ区、下段=Ⅳ～Ⅵ区、S=1/500)



第19図 調査区割図

期とされる直径約6m程の円形の竪穴住居跡が検出されている。続く古墳時代にも、本遺跡周辺は活況を呈し、多数の円墳や前方後円墳が築造されている。全長約21mの前方後円墳の国分寺六ツ目古墳は、後円部に竪穴式石室、粘土槨、箱式石棺の3基の埋葬施設を設けていた。そのうち竪穴式石室から、鉄剣・鉄刀・鉄斧・鉄鏃などが出土し、4世紀中頃の築造が想定されている。また全長約30mの前方後円墳の御厩天神社古墳は、墳丘裾から円筒埴輪が採集されており、5世紀中頃を中心とする築造が想定されている。また堂山・六ツ目山の東斜面には多数の円墳群が築造されていたが、調査されずに破壊された古墳も多い。そのうち本堯寺北1号墳は、径約10m程の小円墳とされ、小規模な竪穴式石室から円筒埴輪棺が出土している。そのほか三ツ塚古墳や御厩大塚古墳は、横穴式石室を有する。また中間西井坪遺跡では、4世紀末から5世紀初頭の埴輪や陶棺などを焼成した大型の野焼き土坑や、それに関連する竪穴住居跡及び円筒埴輪が出土した古墳3基が検出されている。続く古代の遺跡としては、正箱遺跡があり、奈良時代後半から平安時代前半にかけての掘立柱建物群が検出され、なかには40㎡を越す大型の建物跡も確認されている。中世から近世にかけての遺跡としては、室町時代の土師質及び瓦質の土器を生産した窯跡が検出された国分寺楠井遺跡のほか、葉王寺遺跡・中間西井坪遺跡では小規模な集落跡が検出されている。また標高304mの堂山山頂には、山城の堂山城が所在する。その他、上述したように地名の由来ともなったいわゆる「塚」が多く存在している。中には古墳の可能性を想定されているものもあるが、ほとんどのものは時代や性格については不明である。

## 2. 調査成果の概要

調査は、市道壇紙森光線より東に延長約310m、面積約4,500㎡を対象に実施した。調査地の地目は、すべて田である。

調査対象地は、ほぼ中央やや東寄りに低地部が存在し、その両側に微高地が展開する地形を呈する。西側微高地の西方にはさらに低地部の存在が推定され、その西側の微高地部分北方には、正箱遺跡が展開する。したがって正箱遺跡がのる微高地と本調査区とは、異なる微高地上に展開する。

今回の調査では、旧石器時代・縄文時代草創期・弥生時代・古墳時代後期・平安時代・鎌倉～室町時代・江戸時代の遺構・遺物が出土した。このうち旧石器時代・縄文時代草創期については、各調査区から若干の遺物が出土したのみであり、明確な遺構には恵まれず、周辺に当該時期の遺跡が展開する可能性を指摘するにとどまる。

以下、各調査区ごとに遺構・遺物について概要を述べていくことにする。

### (1) I 区の調査

I 区は調査対象地の最も東に位置する調査区で、面積は約1,042㎡である。微高地部分の西斜面部にあたり、調査前は微地形に合わせて西に下る3枚の水田ないしは荒地に区画されていた。現地表面の標高は29.7m前後である。調査区は顕著な削平を被っており、調査区中央部で微量の弥生土器や石鏃などが出土した薄い包含層が残存していたのを除くと、概ね現耕作土直下で淡黄色～黄褐色系粘土・シルト層のいわゆる地山層が検出された。地山層は、調査区東端部で0.1m、西半部で1.0mの層厚を有し、西に傾斜して堆積し、本層下位には灰色系砂礫層が認められる。トレンチ部での所見では、砂礫層は2m以上の層厚を有し、長径数cmから30cm前後の砂岩礫・風化礫で構成され、かなりの湧水が認められた。本調査区で確認されたこうした地山層の基本的な層序関係は、基盤と



なる砂礫層上面の起伏によって上位の層位に若干のバリエーションは認められるものの、概ね各調査区に普遍的に認められるものである。なお遺構面は西に傾斜して検出され、遺構面上面の標高は東端部で29.6m、西端部で29.3mとなり、約0.3mの比高差がある。

検出された遺構は、溝4・柵列?1・流路1などがある。顕著な削平によって遺構の遺存状況は悪く、また遺物量も少ないため、遺構の時期・性格が判明した

ものはない。検出された溝のうちSD10を除く3条の溝は、いずれもコンターラインに概ね平行してⅡ区低地部にむかって北西方向に延びる。またSD10は、現在の地割りの方向に概ね合致してN8°Eに直線状に延びる溝で、土器細片が数点出土した。埋土の特徴から中世以前の可能性が考えられるのみで、性格などは判然としない。また柵列としたSA01は、調査区南端よりN11°Eに北東方向に約15m延び、屈曲してN4°Wの北西方向に延びる小穴列である。直径約0.2~0.4m・深さ約0.1m程の小穴が、0.3~1.0m間隔で、17穴検出された。検出当初は柵列として調査を進めたが、埋土が砂質を帯びており、底面の形状がいびつで、いずれにも柱痕が認められなかったことなどから、むしろ底面の起伏の激しい溝が、削平によって痕跡的に遺存したものであると判断される。遺物は出土していない。

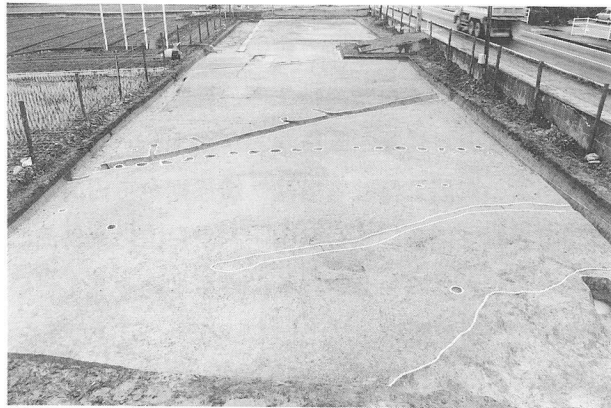


写真14 Ⅰ区全景(西から)

## (2) Ⅱ・Ⅲ区の調査

Ⅱ・Ⅲ区は、Ⅰ区とⅣ区の微高地間の幅約100m程の低地部に位置し、調査の結果5条の流路が検出された。現地表面の標高は、29.5m前後である。

この流路の上面には、灰色及び褐色系粘土の水平堆積層が3~7層ほど確認され、そのうち水田に伴うと考えられる畦畔状の高まりが2面検出された。上層の遺構を第1遺構面、下層の遺構を第2遺構面として、また水田遺構のベースとなる流路を第3遺構面として調査を行なった。以下、各遺構面毎に概要を記述していく。

### 第1遺構面の遺構

第1遺構面とする水田面は、Ⅲ区SR05上面においてのみ検出された。SR01・02及びSR06上面では、後世の削平・攪拌によるため当該期の畦畔は確認されていない。また調査時のミスから、一部第2遺構面まで重機によって掘り下げってしまったため、遺構の検出状況は極めて悪いものとなってしまった。畦畔101は、



写真15 Ⅲ区第1面全景(西から)

幅60cm・高さ8cmの断面台形の畦畔で、長径2～10cm程度のベース黄色粘土のブロック土を多量に含んでいる。調査区内で延長約10m検出された。畦畔101の方向はN53°Eであり、現在の地割の方向（条里地割）とは大きく異なり、下層の流路に規制された状況がうかがえる。畦畔は3本検出され、そこから4筆の水田が復元されるが、上述したような理由から、1筆の面積が判明するものはない。耕土層からの出土遺物は極めて少ないが、瓦器碗・西村産瓦質土器碗などの破片が出土しており、概ね13～14世紀を下限とするものと考えられる。

## 第2遺構面の遺構

第2遺構面とする水田面は、Ⅲ区SR05・06上面で検出された。Ⅱ区では平・断面を精査したが、当該期の畦畔など遺構は確認されなかった。水田面は計15筆検出され、1筆の面積は25～47m<sup>2</sup>と小区画である。SR05の水田面は、流路を横切るかたちに配された幅2.2～2.3m、高さ0.15mの大畦畔201によって大きく南北に2分され、さらに小畦畔によって計5枚の水田が造成されている。大畦畔201は、第1遺構面の畦畔101にほぼ重複して検出されており、基本的な地割の方向性は両時期において大きくは変化していないようである。また水田面のベースとなる黄灰色粘土層中には、長径1～10cmの多量のベース黄色粘土及び下位層のブロック土が含まれており、水田造成に伴い整地された可能性がうかがえる。一方SR06の水田では、小畦畔のみで区画された10枚の水田が検出された。概ね南北に主軸をとる小畦畔では、ほぼ中央付近にいずれも幅0.4～0.5mの水口が設けられており、また東西に主軸をとる小畦畔には水口は認められず、いわゆる「懸け流し」によって給水していたことが判明した。小畦畔は、幅0.2～0.4m・高さ0.06m前後の断面台形状を呈して、上面に平坦部を有する。

本遺構面の遺構の時期については、耕土層からの遺物は少なく根拠に乏しい。水田面ベース層より6世紀末頃の須恵器が出土し、また水田面上面の包含層中より古代前半頃の遺物が出土していることからこの間に求められ、より後者の時期に近いものと推定される。詳細な時期については、出土遺物の整理を待って判断したい。

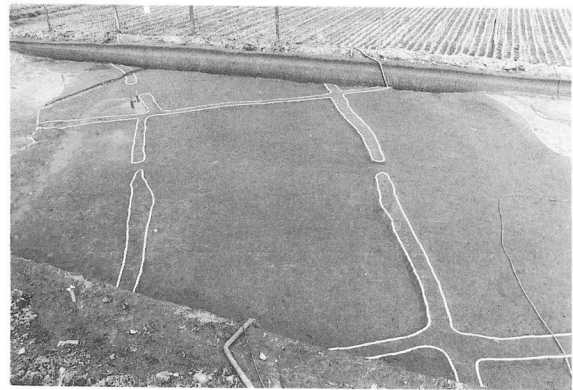
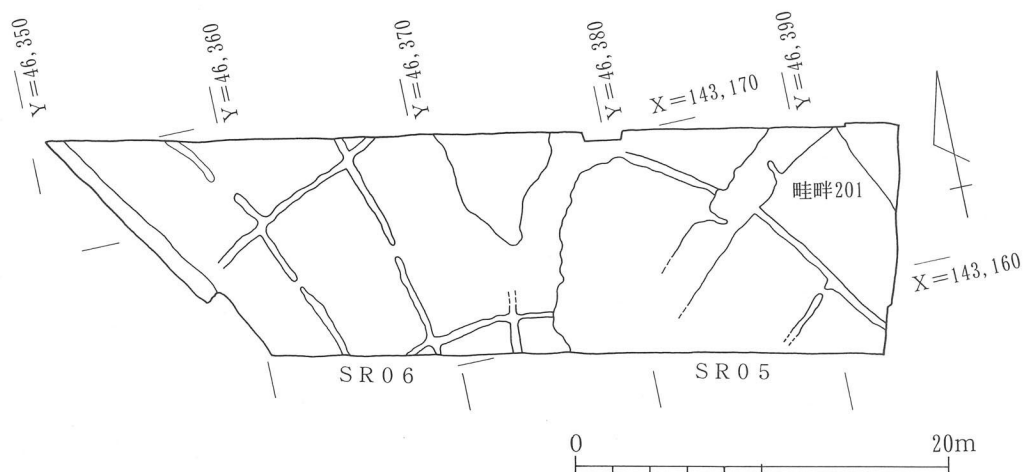


写真16 Ⅲ区第2面西半全景(南から)



第20図 Ⅲ区第2面遺構配置図 (S=1/400)

### 第3面の遺構

第3遺構面の遺構には、上述したように5条の流路がある。各流路は大きく蛇行しながら北～北西方向に流下しており、その規模は幅6～9m・深さ0.3～0.4mと概ね近似する。埋土は3ないし4層に細分され、大半は粘土～シルト・細～中砂が堆積しており、顕著な水流の存在は想定しがたく湿地状を呈して徐々に埋没していったようである。また各流路の埋土は近似しており、埋没過程に若干の時期差を有しながらも、一定期間は併存していた可能性が高い。遺物は、各流路とも上位層より6世紀頃の須恵器が、下位層より弥生土器・古式土師器・石器などが出土した。出土遺物より、各流路は遅くとも弥生時代後期頃までには埋没が一定程度進行し、古墳時代後期頃には河川機能をほぼ失い、後に耕作域となる低地部が形成されていたと推定される。

#### (3) IV区の調査

IV区は、東西65m、南北15m、面積約940m<sup>2</sup>の調査区で、調査開始前の地目はすべて田である。本調査区の東端には、南方より延びてきた低丘陵性の狭長な微高地が存在し、調査区内で幅約40mを測る。この微高地の東西両側は緩やかに下り、東側にはⅡ・Ⅲ区の低地部が存在し、西側にはV区の微高地部との間にSR08が配される。微高地部分の地割は舌状を呈して、西側低地部の水田面との間に比高差約0.2mの小崖をもって隔たる。なお本調査区は現在調査途中であり、現状までに判明した事実についてのみ記すが、なお検討不足の点もあり、事実関係については正式報告書に委ねたい。

この微高地部分には、現耕作土直下で最大厚0.1mの灰色シルト層が概ね水平に堆積し、中世頃の遺物を包含する。この包含層下位には、淡黄色粘土のいわゆる地山層が広がる。微高地部分では削平により遺構はまったく確認されなかった。また地山面上面に認められた中世包含層の存在から、こうした削平行為が中世段階にまで遡ることが確認された。

微高地の西側は、低地部となりSR08が配される。この低地部では、現耕作土直下に最大厚0.2mで、最大4層に細分される淡黄色系シルトの水平堆積層がある。本層からは、弥生時代～中世にかけての遺物の他に、微量の近世陶磁器が出土しており、当該時期の耕作土層と考えている。この近世耕作土層下位にはSR08上面を中心に、褐色系粘土の薄層が堆積し、8～9世紀代の遺物を多量に包含する。SD25などは本層上面より掘り込まれている。また本層下位より、SR08の埋土となる。SR08は、幅約15m、深さ約1.0mの流路で概ね北東方向に流れる。SR08の埋土は、Ⅱ・Ⅲ区低地部の流路群のそれとは明瞭に相違し、異なる環境下での堆積が考えられる。

#### (4) V・VI区の調査

V・VI区は、本年度調査対象地の西端に位置する調査区である。調査面積は、V区で約410m<sup>2</sup>、VI区で約780m<sup>2</sup>である。V・VI区は東西幅約80mの比較的安定した微高地上に位置し、東はIV区SR08によって、西は蛇行しながら北流するSR04によって区切られる。現地表面の標高は29.8m前後であり、V区宅地部分がピークとなる。V区も現在調査途中であり、IV区同様現状までに判明した事実についてのみ記すことにする。

V・VI区では、現耕作土下に最大厚10～15cmの灰白色及び黄褐色系粘質シルトの水平堆積層が認められた。本層中からは微量ながらも近世の陶磁器類が出土することから、当該期の旧耕作土層の

可能性が考えられる。近世とした遺構は、すべて本層下面より掘り込まれており、また特に遺構埋土中からの出土遺物が認められなかった場合でも、埋土が本層に近似することをもって当該時期に含めて記述している。本層下位には、Ⅴ区の微高地西斜面部を中心に黄灰色シルト・明黄褐色砂混り粘土の薄層が堆積し、古代を中心とする遺物が出土する。Ⅳ区SR08上面の包含層との層位的関係については、まだ把握されていない。本層下面で、いわゆる地山と呼ばれる黄色砂混り粘土層が検出される。またSR04上面には、Ⅳ区SR08と同様に多量の8世紀代の遺物を包含する薄層が認められ、周辺に当該期の集落域が展開することが予想された。

Ⅵ区で検出された遺構には、古墳時代末の集落と、中世の溝、近世の屋敷地などがある。以下時代順に概要を記していく。

### 古墳時代末の遺構

Ⅵ区SR04の東西で、2箇所の柱穴群が検出され、各々6棟と1棟の掘立柱建物が復元された。SR04の東に位置する集落を集落Ⅰ、西に位置する集落を集落Ⅱとして区別する。集落Ⅱに属する遺構からの出土遺物は極めて乏しく不確定な要素は残るが、とりあえずこの時期に含めて記述する。集落Ⅰの東側には、浅い落ち込みのSR03が存在する。SR03はとりあえず流路として調査を進めたが、深さが0.2mと浅く、また上・下層ともベースブロックを含んでおり、人為的な埋め戻し・整地の可能性が想定されるなど、流路とするには問題点も少なくない。なお、SR04の東岸にはSR03とよく似た浅い落ち込みのSD03・04が、西岸にはSD07がそれぞれ配されており、SR03の東側にSR04のような流路本体が検出される可能性も残される。しかしそれが集落Ⅰの東縁を画する流路となるかどうかは、来年度に予定されているⅤ区西半部の調査を待つ必要がある。Ⅴ区では当該期に比定される溝群(SD16~22)などを検出しているが、明確な建物遺構は復元されておらず、集落域に含まれるかどうかは今後の調査によるところが大きい。現状ではⅥ区以東に集落域が拡がる可能性を指摘しておくにとどめたい。



写真17 Ⅵ区集落Ⅰ全景(東から)

集落Ⅰに伴う遺構には、SB01~06、SX01がある。掘立柱建物群は、1間×2間~2間×3間で、床面積7.1~23.6m<sup>2</sup>程度の小規模なもののみで構成される。建物の主軸方向は各建物によって若干のバラツキはあるが、概ねN20°E(SB01)とN30°E(SB04~06)、N40°E(SB02・03)の3者が認められ、SB03とSB04のように重複する建物もあることから、2時期以上の変遷が想定される。SX01は、東西9.8m・南北8.7m・深さ0.3mの不整形な浅い落ち込みである。建物SB02・03・05などと重複し、建物群との先後関係についてはすべてについて判断できたわけではないが、建物群より先行する可能性が高い。また出土遺物からは、建物群との間に大きな時期差は認められない。底面は長径2m前後の楕円形状の掘り込みが随所に認められ、起伏が顕著である。遺構の性格については特定しがたいが、採土痕の可能性を考えておきたい。また集落Ⅰからの特記

すべき遺物として、多量の焼土塊とともにフイゴ羽口もしくは窯壁片と考えられるものがある。

先述したように集落Ⅱは、SR04の西側で検出された掘立柱建物1棟で構成される集落である。集落域はさらに西及び北方向に展開することが予想され、来年度に予定されているⅥ区以西の調査によって集落本体が検出される可能性は高い。今年度対象区内で集落Ⅱに伴う遺構には、SB07・SK06・SD08などがある。SB07は調査区北端で検出された掘立柱建物で、北半部が調査区外に延長するため詳細な規模は不明である。現状でN6.5°Eに主軸をとる、1間×2間・床面積5.6㎡の小規模な建物を復元している。建物の主軸方向は、集落Ⅰの建物群とは大きく異なる。

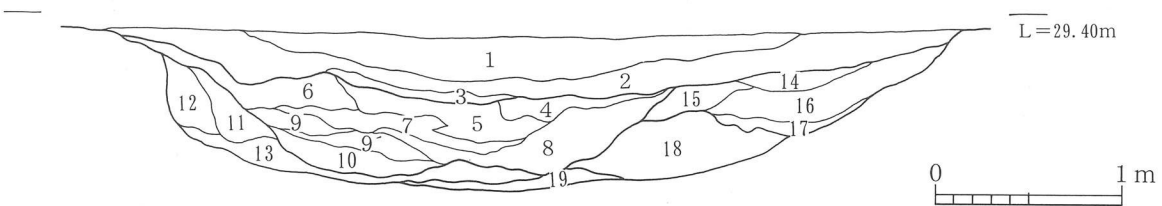
集落ⅠとⅡを画するSR04は、幅約6m・深さ約1m、断面形は概ね逆台形状を呈する流路で、調査区内をクランク状に大きく蛇行しながら概ね北東方向に延びる。調査区南端付近で2流に分岐するようであるが、大半が調査区外となるため詳細は不明である。埋土は大きく5層に大別された。上層は、黒褐色系粘土層で流路死滅後の自然堆積層と考えられる。鉄鏝1点・馬歯2点などが出土した。中層Ⅰは、灰色系の砂及び粘土層で最大8層に細分される。集落機能時の堆積層と考えられ、多量の遺物を包含する。この中層Ⅰは、流路埋没後に人為的に再掘削された堆積状況を呈しており、当初この中層のみをSD06として、SR04とは性格が異なるものとして調



写真18 SR04中層Ⅰ遺物出土状況(北西から)



写真19 SR04上層鉄鏝出土状況(南から)



**上層**

- 1. 黒褐色粘土 (Mn多、Fe)
- 2. にぶい黄褐色粘土 (Mn多、Fe)
- 3. 褐灰色粘土 (Fe)

**中層Ⅰ**

- 4. 褐色粘土 (Mn、Fe)
- 5. 黄灰色粘土 (Fe)
- 6. 褐色粘土 (Mn、Fe多)
- 7. 褐灰色粘土 (Fe)

- 8. 暗灰～黒褐色粘土 (Fe)
- 9. 灰白色中～粗砂・暗灰黄色粘土ラミナー
- 10. 暗灰色粘土・淡黄色中砂ラミナー

**中層Ⅱ**

- 11. 灰色粘土 (Mn)
- 12. 灰色シルト (Mn、Fe)
- 13. 灰色粘土・灰白色細～中砂ラミナー

**下層Ⅰ**

- 14. にぶい黄褐色粘土 (Mn、Fe多)

- 15. 灰色砂混り粘土 (Mn、Fe多)

- 16. 暗灰黄色粘土 (Mn、Fe多)

- 17. 黄灰色粘土 (Fe)

**下層Ⅱ**

- 18. 灰色～暗灰～淡黄色細～中層・灰色粘土ラミナー

**下層Ⅲ**

- 19. 明黄褐色粗砂 (径2～5cmの風化礫多含)

第21図 SR04 土層断面図 (S=1/40)

査を進めていたが、下層の遺物内容や流路方向から必ずしも分離することは適切ではないと考え、途中でSR04中層Ⅰと名称を変更した。TK209からTK217にかけての遺物が出土しており、先の集落Ⅰの建物群の変遷とも符合する。中層Ⅱも、中層Ⅰと同様に人為的な掘削後に堆積した土層である。下層Ⅰは、黄色系粘土・シルトの水平堆積層で、遺物は極めて少ない。下層Ⅱは、灰色系粘土・細砂～粗砂の厚40cm以上のラミナー層で、活発な水流を感じさせる。弥生土器などが出土したが、量的には少ない。下層Ⅲは、下層Ⅱとの分離は困難だが、流路底面に薄く堆積した黄褐色系の小礫混じりの粗砂層で、底面にへばりつくような状況で、弥生土器や石器が出土した。時期は、前期末から中期初頭・中期中葉・後期後半頃の大きく3時期があり、周辺に当該期の集落が展開した可能性を示唆する。

### 中世の遺構

中世の遺構には、Ⅴ区SD16・SX07、Ⅵ区SD01・02の4条の溝がある。このうちⅤ区の遺構については現在調査途中であり省略したい。

さてSD02は、N13°Eに直線状に北流する溝で、流路方向はいわゆる条里地割の方向に合致する。幅2.7～4.2m、深さ0.5～0.6mの幹線水路を思わせる大溝である。土師器小皿・杯、西村産瓦質土器椀、瓦器椀、白磁椀などの破片が出土している。埋土上位と下位から出土した遺物に大きな時期差は認められず、13～14世紀の短期間に掘削・埋没したことが推定される。また出土した遺物量は極めて乏しいことから、周辺に当該期の集落などは想定しがたい。さらに現在の地割から復元される坪界線は、Ⅵ区西

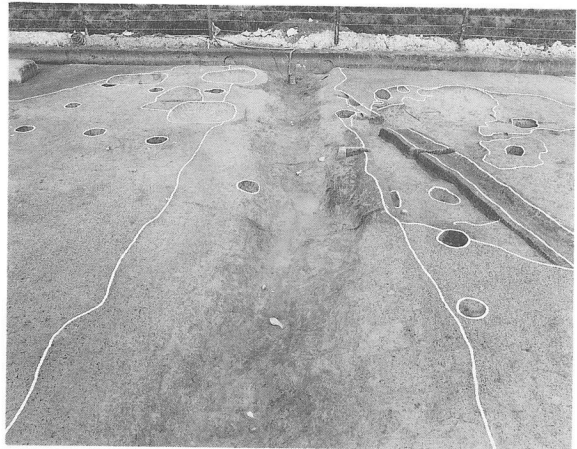
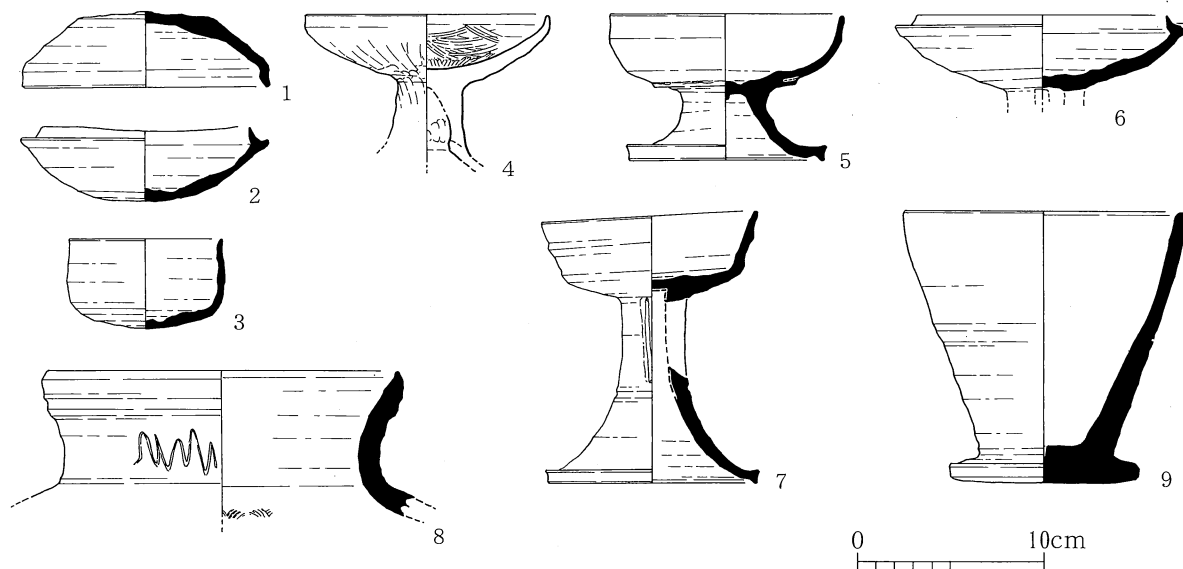


写真20 SD02全景(南から)

端の市道部分が相当する。SD02はこの坪界線より約30m程東に偏っており、方向は一致するものの位置に若干のズレが認められる。このズレの要因については、今年度の調査では明らかにすることができなかった。来年度に予定されるⅥ区以西の調査によって、より具体的に判明することが期待される。なお本遺跡においては、当該期に至るまで基幹的な性格を有する水路は検出されていない。Ⅳ・Ⅵ区で検出された自然河川は、遅くとも古代前半頃には平準化されその機能は死滅しており、当該期においてまでこうした自然河川を水源としていたとは想定しがたい。おそらくは当該期以前まではこうした流路から小規模な溝を掘削することによって賄われていた水利系統が、ある時期を境にして基本的には古川からの取水に切り替えられたことが想像される。中世段階における灌漑水路網の整備は、こうした地形環境の変化と無縁ではなかろう。古川は、現状で兩岸に段丘を伴い、周辺平野部との比高差数mの谷底を流下している。古川の段丘の形成、自然河川の埋没・流路の固定化、幹線水路網の整備といった3者の有機的な関連については、今後の調査によって明らかにされるものと期待される。

## 近世の遺構

近世の遺構は、主にV区において検出された。V区では、東限を溝SD15によって画された範囲に、多数の柱穴群と土坑が検出され、当該期の屋敷地と推定される。現在調査途中であり建物遺構は復元されていない。また時期については、SD15より肥前産の陶磁器や寛永通寶1枚が出土しており、18世紀頃が想定される。VI区では、4基の土坑のみ検出された。土坑は、長軸1.5m前後・短軸1.1m前後の整った長方形を呈し、深さは0.3m前後で断面形は逆台形状を呈して底面が平坦に掘り込まれるなど、概ね規格的である。時期を特定できる遺物は出土していないが、18世紀代の遺物が出土した旧耕土層に近似した埋土を有することから、時期を判断した。



第22図 出土遺物実測図 (S=1/4)

番号	遺構名	種別・器種	法量(cm)	胎土	色調	調整技法等
1	SR04上層	須恵器・杯蓋	(口)13.0 (高)4.0	密, 0.1~2.0mmの石英粒含む	灰~青灰色	天井部外面, 回転ヘラケズリ 内外面, 回転ナデ
2	SR04中層	須恵器・杯身	(口)10.9 (高)3.9	やや粗, 0.1~8.0mmの石英・砂岩粒?含む	灰色	底部外面, 回転ヘラケズリ 内外面, 回転ナデ
3	SR04中層	須恵器・杯身	(口)8.0 (高)4.7	密, 0.1~3.0mmの石英粒微量含む	灰白色	底部外面, 回転ヘラケズリ 内外面, 回転ナデ
4	SD07	土師器・高杯	(口)12.9	やや粗, 0.1~4.0mmの石英・長石・赤色粒含む	淡橙色~ 淡黄橙色	杯部内面, ヘラミガキ 杯部外面, ヘラケズリ? 脚部外面, ケズリのあとナデ?
5	SD07	須恵器・高杯	(口)12.2 (高)7.8 (底)10.3	密, 微砂粒含む	灰白色	外面, 回転ナデ 内面, 回転ナデ
6	SD07	須恵器・高杯	(口)13.4	密, 0.1~3.0mmの石英粒含む	灰~灰白色	内外面, 回転ナデ 脚部, 長方形2方向の透し孔
7	SD07	須恵器・高杯	(口)11.5 (高)14.5 (底)11.1	密, 微砂粒含む	灰色	内外面, 回転ナデ 脚部, 2方向の1段透し孔
8	SD07	須恵器・甕	(口)18.6	密, 0.1~1.0mmの石英粒含む	青灰色	内外面, 回転ナデ 頸部外面, ヘラ描き波状文
9	SR04中層 SD07	須恵器・鉢	(口)14.6 (高)14.5 (底)10.0	密, 0.1~1.0mmの石英粒含む	灰~青灰色	内外面, 回転ナデ 底部外面, ナデ

第2表 出土遺物観察表

## VI. 寺田・産宮通遺跡

### 1. 周辺の立地と環境

寺田・産宮通遺跡は、大川町の北西、大川郡大川町富田西大道に所在する。大川町は、南北及び東の三方を山塊に囲まれ、町中央から西方の寒川町に向かって平野部が広がる。南方の讃岐山脈からはこの平野部に向かって多くの低丘陵が北に細長く延びる。この低丘陵間を柘檀川、古川、爛川等の小河川が北流し、平野北端付近で西流する津田川に合流する。そして雨滝山の山裾を回るようにして津田湾に注いでいる。本遺跡は、讃岐山脈から北西方向に向かって派生する低丘陵部の末端部に位置する。調査区は、南端部をほぼ県道10号線に接し、約13～14m幅で、途中、古川に分断されるものの北北東に約800mの範囲に直線的に伸びる。

周辺には、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が広範囲に分布している。

弥生時代後期に関しては、本遺跡から200m西に寺田大角遺跡があるが、4つの竪穴住居跡等が発掘されている。さらにその南、讃岐山脈の尾根の麓や微高地上に大規模集落遺跡である森広遺跡群がある。遺跡は県道10号線沿いに分布しており、西から布勢遺跡・森広天神遺跡・石田高校校庭遺跡・加藤遺跡など東西約1.5kmの範囲に広がる。森広天神遺跡からは巴型銅器8点、加藤遺跡では扁平鈕式袈裟文銅鐸と考えられる破片7点、石田神社境内遺跡では平形銅剣3口など、青銅器を多種、多様に保有した地域でもあった。また、本遺跡の約400m北には、鉄剣を伴う大型土壙や多数の壺棺などを中心とする集団墓群で知られる大井遺跡がある。さらに北には標高253mの雨滝山がある。中世の山城としても知られるが、西麓から南麓にかけて多数の遺跡が散在する。奥10号、奥11号などで墳丘墓が検出されている。

古墳時代前期には奥3号、13号、14号等が築造される。なかでも奥3号墳は椿井大塚山古墳と同範の三角縁三神五獣鏡が出土しており畿内政権との関連が考えられる。また、古枝古墳でも方格規矩四神鏡を出土している。古墳時代中期になると、甲冑等の遺物が出土した寺尾古墳群、大井七つ塚古墳群等の古式群集墳が築造される一方、大規模な古墳群は津田湾沿岸や富田茶臼山古墳が知られる。富田茶臼山古墳は墳丘全長約140m、3段に築造された四国最大の前方後円墳である。埋葬遺構は未発掘のため定かではないが、墳丘上に円筒埴輪、家型埴輪それに葺石があることが知られており、さらに近年、主墳部とほぼ同時期に築造されたと考えられる3基の陪塚が確認されている。古墳時代後期になると森広天神古墳、東讃地域最大の横穴式石室を持つ中尾古墳など有力者が埋葬されたと考えられる大型円墳が築造されるほか、天王山古墳群、蓑神古墳群、蓑神東古墳群、大末古墳群、相ノ山古墳群、極楽寺古墳群などの群集墳が形成される。

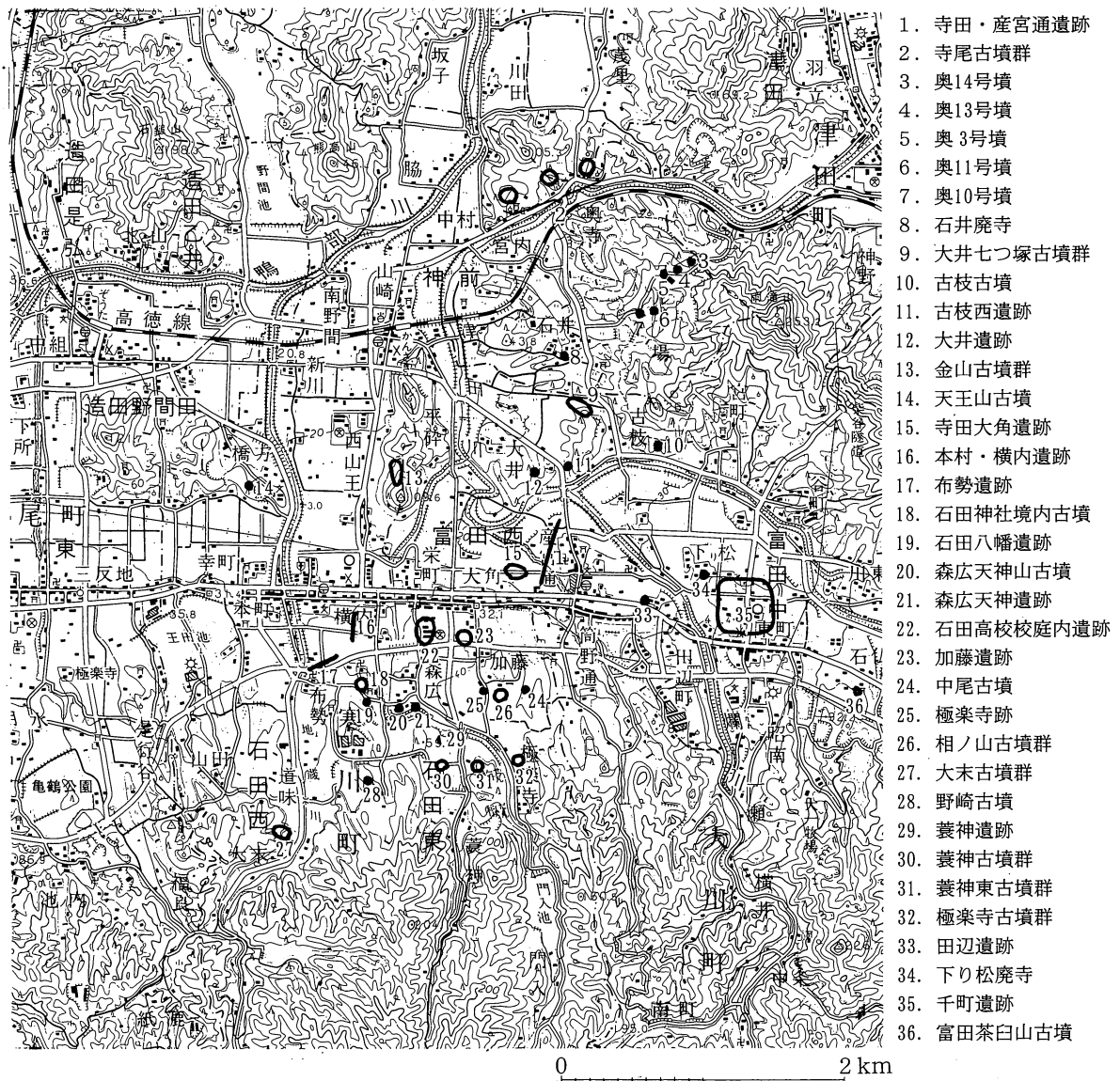
古代に関して、この付近は条里型地割が比較的明瞭に残っている地域であり、また本遺跡の南方を推定南海道が通っている。この南海道との関連性で考えると、讃岐六駅の「松本駅」の位置が、当遺跡の東方、現在の田面・石仏・東町・千町付近と推定されている。また、沿道の遺跡として、まず古代寺院の下り松麿寺跡、極楽寺跡があげられる。下り松麿寺跡は、七葉複弁蓮花文鏡瓦など奈良時代の瓦で知られ、極楽寺跡は、四天王寺式伽藍配置をもつ白鳳時代の寺院で、付近からは重弧文軒平瓦、単弁蓮華文軒丸瓦の他、錫杖、銅鏡を検出している。さらに、近年、石田高校校庭遺跡では奈良時代前半期の溝跡等の遺構・遺物、古代以降の掘立建物跡が、本村・横内遺跡では、奈良・平安時代の掘



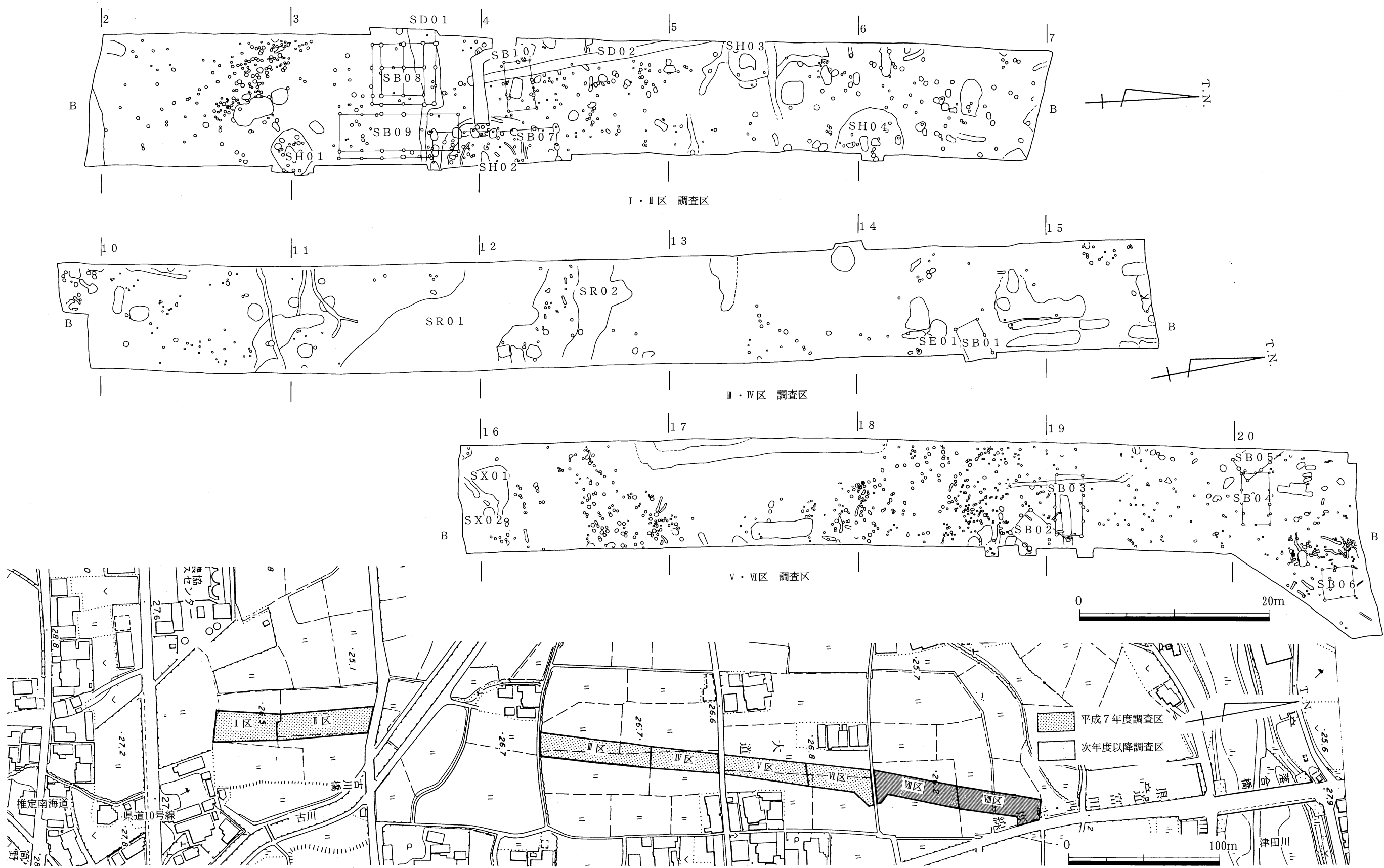
立柱建物跡等の遺構，遺物が報告されている。

[参考文献]

- 香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財調査センター 『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 本村・横内遺跡』 1995  
 香川県教育委員会 『石田高校校庭遺跡』 1993  
 大川町 『大川町史』 1978  
 大川町教育委員会 『富田茶白山古墳』 1990  
 香川県 『香川県史 1 原始・古代』 1988 四国新聞社



第23図 遺跡位置及び周辺遺跡図



第24図 遺構配置及び調査区割図

## 2. 調査概要

調査地は県道高松長尾大内線より北に延長約800mを測る。対象面積5,948㎡を測り、その内本年度は4,404㎡の調査を実施した。対象地は南より北に向けてⅠ～Ⅷ区に分割した。その内Ⅰ～Ⅵ区までを今年度の調査対象にした。対象地は阿讃山脈より北に派生する舌状丘陵の先端部分に位置し、標高は26m前後を測る。対象地南半部のⅡ区とⅢ区の間には津田川の支流である古川と古川の氾濫原が所在し、調査地を南北に区分している。その結果、調査地を地形で分ければ南北二つの微高地と、北微高地の南に所在する埋積谷、合わせて三分区できる。南微高地に含まれるのがⅠ・Ⅱ区、北微高地に含まれるのがⅣ～Ⅵ区、埋積谷に含まれるのがⅢ区である。

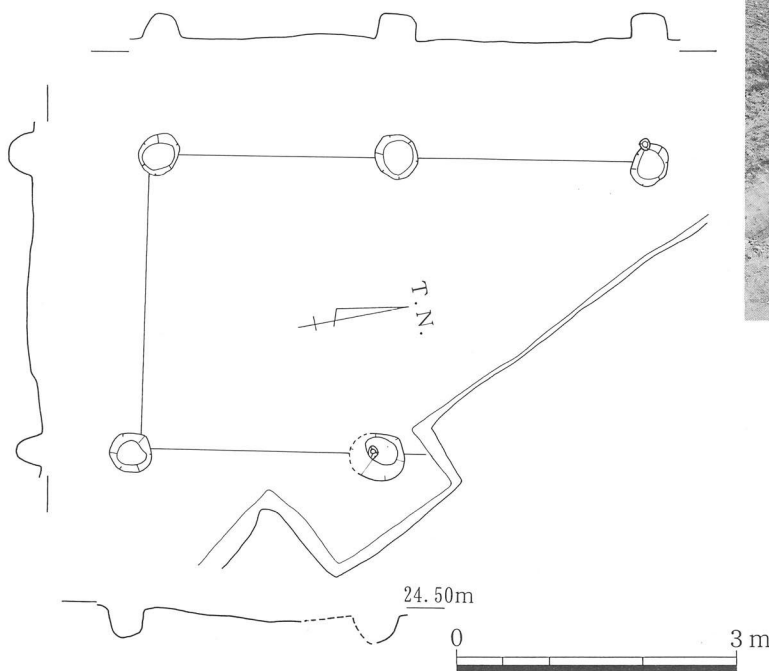
Ⅳ～Ⅵ区の遺構面は削平を受けたものと考えられ、耕作土直下、地表面より約0.4m下に遺構面が広がっている。Ⅰ・Ⅱ区の北半部では、遺構面を二面検出した。また浅い谷状の地形を呈するⅢ区の上位では中世の小溝群、下位では弥生中期後半、後期後半の遺物を主体とした良好な遺物包含層を検出した。包含層の厚さは約0.5mを測る。地表面下約1.5mの谷底ではピット、土坑等を少数検出した。なお、谷底直上からは弥生の小形仿製鏡が1点出土している。

今回の調査では、南微高地上のⅠ・Ⅱ区より、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居跡、古墳時代後期末の掘立柱建物、溝、中世の掘立柱建物等を検出した。北微高地上のⅣ～Ⅵ区では、弥生時代中期の掘立柱建物、平安時代後半の落ち込み、鎌倉時代の井戸等を検出した。

## 3. 遺構・遺物

### (1) 弥生時代中期

SB02 Ⅵ区南端で検出した掘立柱建物である。2間(5.4m)以上×1間(3.2m)、検出面積17㎡、主軸方位はN-48°-Wを示す。柱間は桁行2.7~2.6m、梁間3.2mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、径約0.4m、深さ約0.3mを測る。埋土は灰色系の砂質土である。



第25図 SB02 平・断面図 (S=1/80)

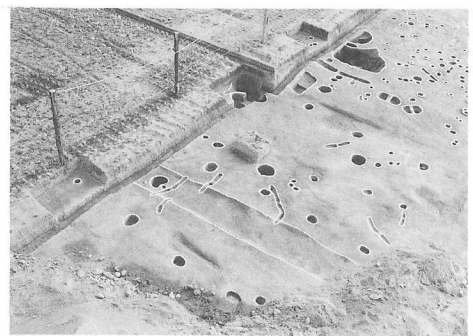
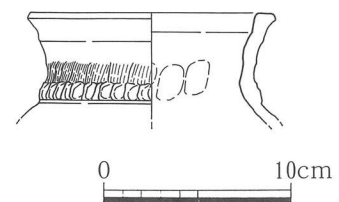


写真21 SB02検出状況

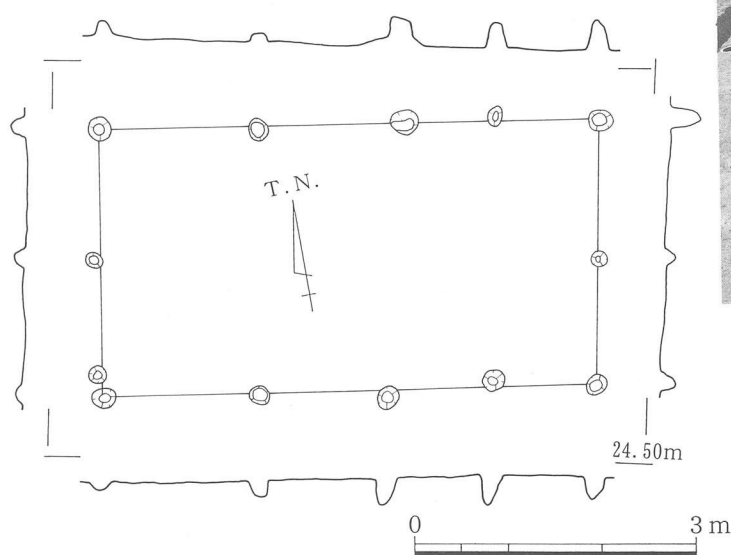


第26図 SB02 出土土器 (S=1/4)

出土遺物としては弥生土器が少量出土している。(第26図)はSB02より出土した、壺形土器の口頸部である。頸部には指頭により凸帯を施す。出土遺物よりこの建物は、弥生時代中期中葉以降にあたる可能性が高い。

SB04 VI区北部で検出した東西棟の掘立柱建物である。4間(5.3m)×2間(2.9m)、検出面積15.4m<sup>2</sup>、主軸方位はN-78°-Wを示す。柱間は桁行1.7~1.0m、梁間1.5~1.3mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、径約0.2m、深さ約0.2mを測る。埋土は黒色系の粘質土である。

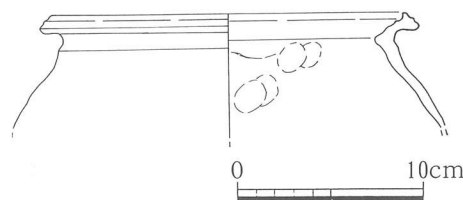
出土遺物としては弥生土器が少量出土している。(第28図)はSB04より出土した、甕形土器の口頸部片である。口縁部には僅かに凹線文が認められる。出土遺物よりこの建物は、弥生時代中期後葉以降にあたる可能性が高い。



第27図 SB04 平・断面図 (S=1/80)



写真22 SB04検出状況



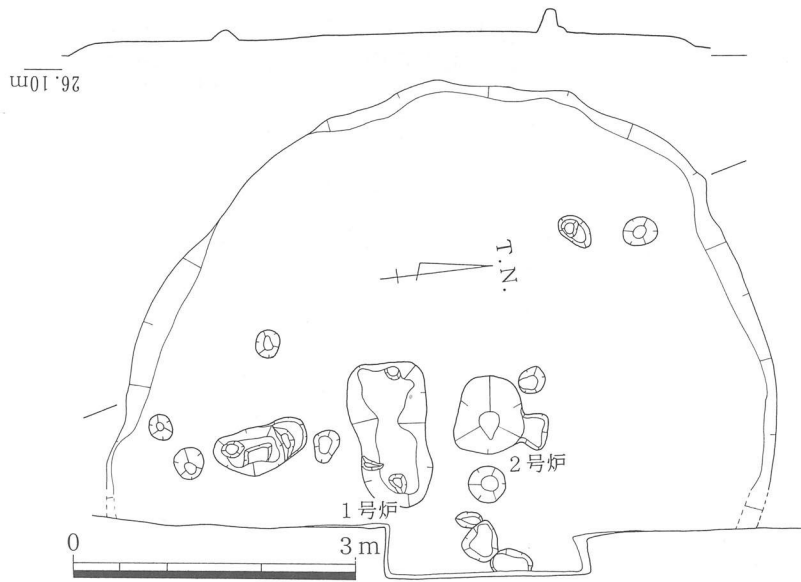
第28図 SB04 出土土器 (S=1/4)

## (2) 弥生時代後期末~古墳時代前期初頭

SH04 II区北部で検出した長径約7.0mを測る、円形の竪穴住居跡である。検出したのは対象地内の西半部で、東半部は対象地外に拡がる。この住居跡は、少なくとも二次期の建替えが考えられ、床面上では多数のピットと二基の炉跡が検出された。主柱穴は3主柱穴を特定できた。主柱穴は小型で径約0.2m、深さ約0.2mを測る。床面には南寄りの位置に、東西主軸で長楕円形状の1号炉跡、ほぼ中央部に不整形の2号炉跡が検出された。1号炉跡は長径2.0m、短径0.9m、深さ0.2mを測る。2号炉跡は長径1.0m、短径0.9m、深さ0.3mを測る。

出土遺物としては埋土上層からは多量の土器、床面直上からは管玉1点が出土している。(第30図)は上層より出土した甕上半部である。外面にタタキとハケ、内面下半部にはヘラケズリが施されている。出土遺物よりこの住居跡は、弥生時代末~古墳時代初頭前後の時期にあたる。

SH03 II区中央部で検出した長径約4.0mを測る、隅丸方形の竪穴住居跡である。西辺は調査区外へ伸び、未検出である。主柱穴は四隅のコーナー部分で4主柱穴を検出した。主柱穴は小型で径



第29図 SH04 平・断面図 (S=1/80)

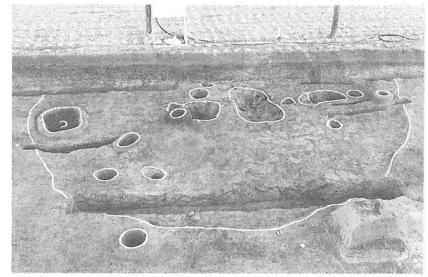
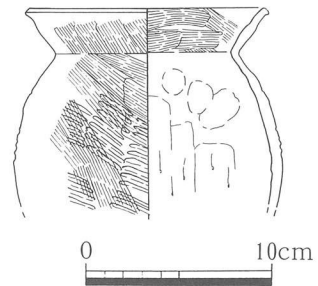
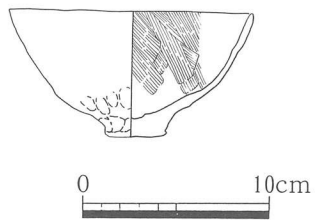


写真23 SH04検出状況



第30図 SH04 出土土器 (S=1/4)



第32図 SH03 出土土器 (S=1/4)

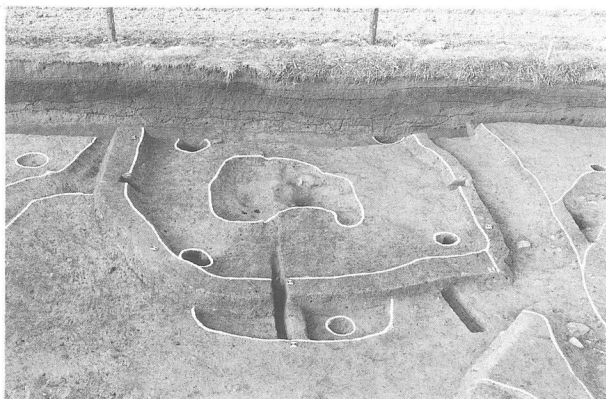
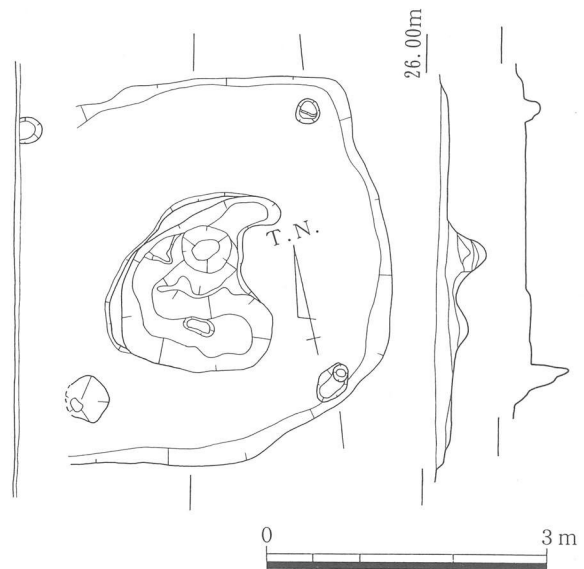


写真24 SH03検出状況



第31図 SH03 平・断面図 (S=1/80)

約0.3m、深さ0.3mを測る。床面中央には、不整円形状の炉跡が検出された。長径1.9m、短径1.0m、深さ0.5mを測る。

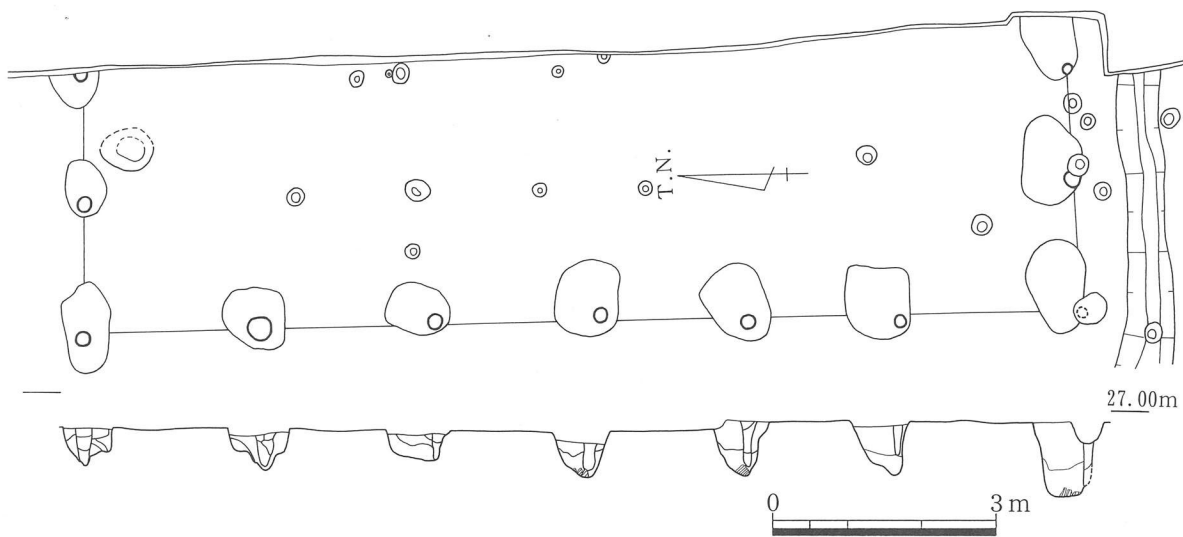
出土遺物としては土器、石器類が出土している。(第32図)はSH03より出土した鉢形土器である。底部は突出した平底、内面にはタテハケが顕著に残る。出土遺物よりこの住居跡は、古墳時代初頭頃と考える。

(3) 古墳時代後期末

SB07 I・II区で検出した、南北棟の大型の掘立柱建物である。6間(13.3m)×2間以上(3.5m)、検出面積46.6m<sup>2</sup>、主軸方位はN-2°-Wを測る。柱間は桁行2.3m、梁間1.8mを測る。柱穴掘形は不整円形を呈し、径約0.9m、深さ約0.6mを測る。全ての柱穴で柱痕が確認された。出土遺物の主体は土師器であるが、須恵器が少量出土している。



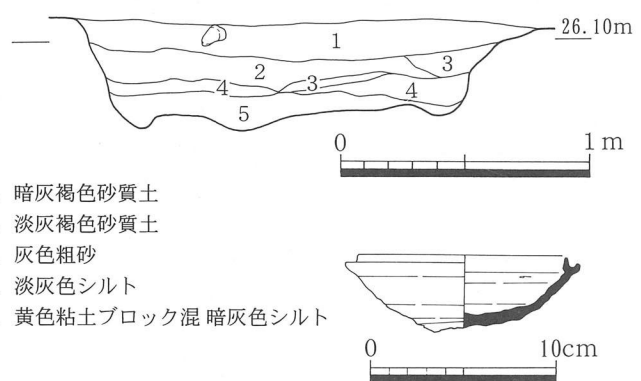
写真25 SB07検出状況



第33図 SB07 平・断面図 (S=1/50)

SD01 SB07の南辺に隣接し、東西方向に伸びる不整形な溝である。東半部はSB07の南辺に隣接し、建物に並行に伸びる。西半部は幅広に拡がり深さも増す。SB07とSD01との配置上の特徴より、SD01はSB07の雨落溝と考えられる。検出長約14.0m、幅約0.5~2.5m、深さ0.1~0.3m、主軸方位はN-3.5°-Wを測る。断面は幅広な逆台形状を呈する。

出土遺物の主体は土師器であるが、須恵器が少量出土している。出土遺物よりこの溝は7世紀初頭頃と考える。



1. 暗灰褐色砂質土
2. 淡灰褐色砂質土
3. 灰色粗砂
4. 淡灰色シルト
5. 黄色粘土ブロック混 暗灰色シルト

第34図 SD01 断面, 出土土器 (S=1/30・1/4)

SD02 II区南半部で検出された溝である。この溝は南北方向に直線的に配されI区との境界部分

で途絶える。検出長約25.0m，幅約1.1m，深さ0.3m，主軸方位はN-3.5°-Wを測る。断面は浅いU字状を呈する。

出土遺物の主体は土師器等であるが，須恵器が少量出土している。(第35図)はSD02より出土した須恵器である。(1)は杯身口縁部，見方によっては杯蓋とも考えられる。(2)は小型の壺形土器の体部である。体部外面下半部にはヘラ削りが微かに残る。出土遺物よりこの溝は，7世紀初頭頃と考える。

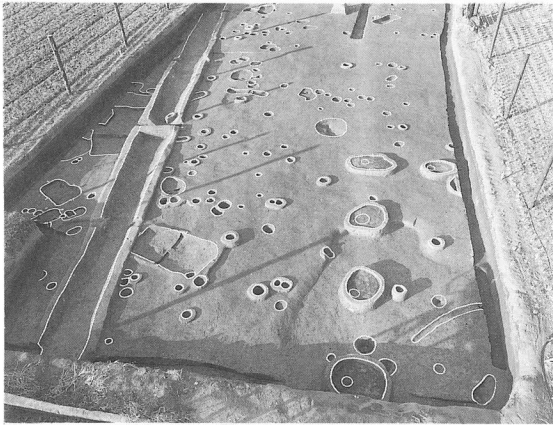
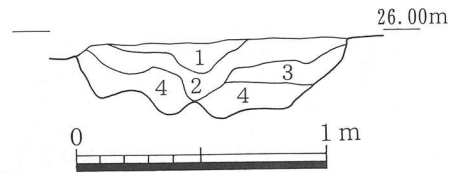
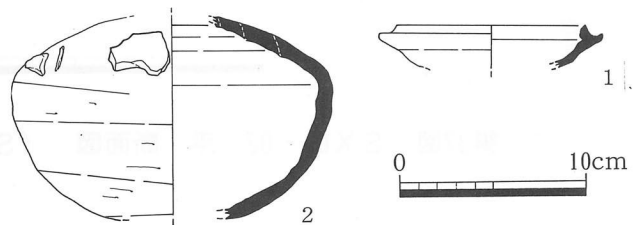


写真26 SD02, SB07検出状況



1. 灰白色細砂、黒色粘土、黄色粘土等のブロック混合層
2. 茶灰色シルト (褐色粘土ブロック含)
3. 淡灰褐色シルト
4. 灰褐色シルト



第35図 SD02 断面，出土土器  
(S=1/30・1/4)

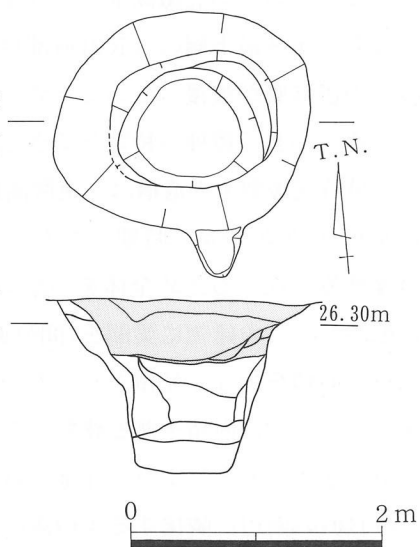
#### (4) 平安時代以降

SB08 I区北半部で検出した西面を除く3面廂の総柱建物である。身舎で2間(5.3m)×2間(4.4m)，検出面積23.3m<sup>2</sup>を測る東西棟の掘立柱建物である。主軸方位はN-88°-Wを示す。柱間は桁行3.0~2.4m，梁間2.2mを測る。柱穴掘形は円形を呈し，径約0.2m，深さ約0.4mを測る。この建物は，出土遺物より中世である。

SE01 IV区中央部で検出した素掘の井戸である。長径2.0m，短径1.6m，深さ1.4mを測る。埋土は約10層に細分できるが，大別して上層は淡灰褐色系の砂であり，下層は暗灰色系の粘質土である。

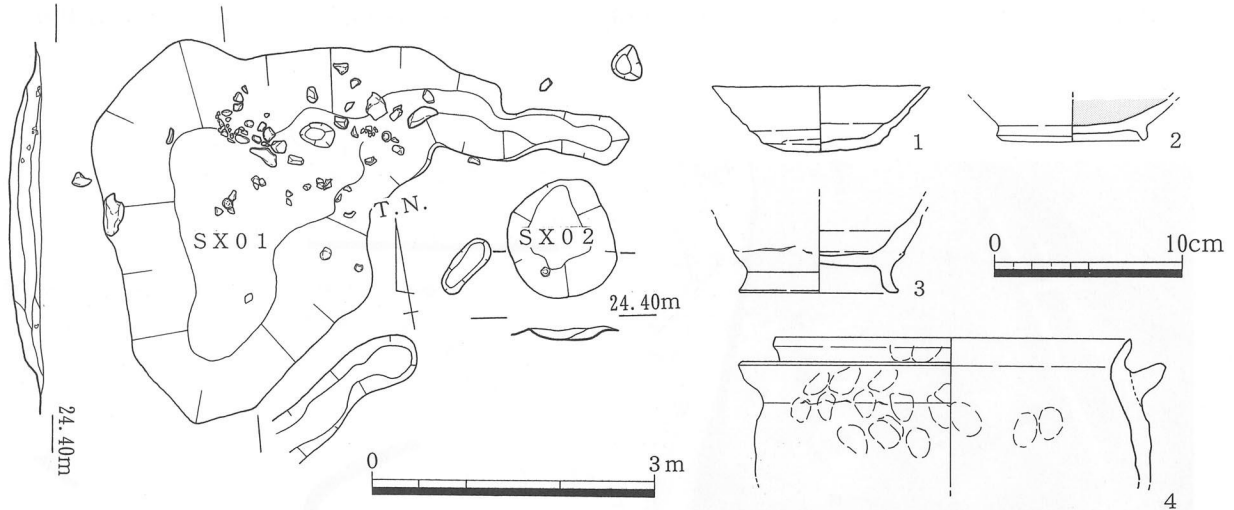
出土遺物としては土師器，須恵器等が上層より，下層からは斎串，桃核等が出土している。出土遺物よりこの井戸は14世紀頃にあたる。

SX01・02 V区南端部で検出した不整形な落ち込みである。SX01は長径5.6m，短径4.0m，深さ0.4mを測る。SX02は長径1.3m，短径1.1m，深さ0.1mを測る。埋土は両者とも暗灰色系の粘土である。



第36図 SE01 平・断面図  
(S=1/60)

(第37図)はSX01・02から出土した遺物である。なお(1)はV区SX02から、他は全てSX01より出土した土器である。(1)は土師質の杯である。底部は平底で、体部は外上方に直線状に伸びる。(2)は内黒の黒色土器碗底部である。(3)は土師質の碗である。底部には長い高台部が「ハ」の字状に付く。(4)は土師質の土釜体部である。



第37図 SX01・02 平・断面図 (S=1/40), 出土土器 (S=1/4)

#### 4. まとめ

- ① 弥生時代中期の遺構は、北微高地上で掘立柱建物で構成される集落を検出した。時期的には中期中葉～後葉までの比較的短期間の集落である。
- ② 弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺構は、南微高地上で竪穴住居跡で構成される集落を検出した。この集落は時期的にも地理的にも北微高地上の集落とは区別すべきであろう。また詳細には報告しなかったが、北微高地に接するⅢ区低地部では多量の弥生時代後期後半の遺物が出土している。そのため北微高地上の対象地周辺に、当該期の集落が展開する可能性は高い。

なお、Ⅲ区最下層のSR01肩部付近では、小形仿製鏡が1点出土した。上面には弥生時代後期後半の包含層が被覆しているため、同一時期ないしはそれ以前の資料である。また、出土した鏡は、残りが悪く鏡種の特定ができていないので、詳細な点は今後の課題である。

- ③ 古墳時代後期末の遺構は、南微高地上に展開する、SB07、SD01、SD02等の遺構が当たる。いずれも7世紀初頭の時期である。SB07は大型の掘立柱建物である。この建物の東側柱列は、対象地外に広がるため全体をつかめていないが、検出状況より少なくとも梁間はあと1間分は東に広がる。この建物に梁間を1間分追加した場合、建物の構造は6間(13.3m)×3間(5.3m)となり、面積を少なく見積もっても約70㎡程度のかかなり大型の建物を想定できる。7世紀初頭の段階で、70㎡程の面積を測る建物は県下でも類例は少なく、規模的な点でSB07は、集落の一般構成員の住居と考えるより、在地の首長クラスの屋敷跡の一建物と捉えた方が適切であろう。また、SB07の南辺に隣接する東西溝のSD01と、SB06より西に南北方向に直線状に配されたSD02は、SB07との配置上の特徴より、SD01はSB07の雨落溝、SD02は屋敷跡の西辺を画する区画溝と考えられる。なお、この屋敷跡の中心部分は、対象地より東側に展開するものと考えられる。



- ④ 平安時代後半では、10世紀代の良好な遺物が出土した北微高地のS X01, S X02等の遺構が存在するため、同時期の集落が周辺に存在する可能性は高い。
- ⑤ 中世の集落は南微高地上に展開する。廂を備えたS B08, S B09等の掘立柱建物である。北微高地上ではS E01以外明確な遺構は見いだせない。そのため北微高地上の当該期は、耕地化が進んでいたものとする。また今回詳細に報告していない、浅い谷状の地形を呈するⅢ区の上位には中世の小溝群を検出している。そのため少なくともこの時期には、耕地化が谷まで及んでいるものと考えられる。

遺構名	調査区	主軸方位	構造・規模	面積 ( $m^2$ )	柱間寸法		検出 遺構名	備 考
			桁行(m)・梁間(m)		桁行(m)	梁間(m)		
SB01	Ⅳ区	N-74°-W	2間(3.9)以上×1間(2.6)	10.1以上	2.0~1.8	2.6	SB01	
SB02	Ⅵ区	N-48°-W	2間(5.4)以上×1間(3.2)	17以上	2.7~2.6	3.2	SB04	
SB03	Ⅵ区	N-79°-W	5間(6.4)×1間(2.8)	17.3	2.0~1.6	2.8~2.3	SB03	
SB04	Ⅵ区	N-78°-W	4間(5.3)×2間(2.9)	15.4	1.7~1.0	1.5~1.3	SB02	
SB05	Ⅵ区	N-36°-W	3間(4.0)以上×2間(2.7)	10.8以上	1.8~1.3	1.6~1.2	SB05	
SB06	Ⅵ区	N-3°-W	2間(3.3)×2間(3.2)	10.6	1.8~1.5	1.8~1.5	SB01	
SB07	I・Ⅱ区	N-2°-W	6間(13.3)×2間(3.5)以上	46.6以上	2.3	1.8	SB01	推定面積約70.0 $m^2$
SB08	I区	N-88°-W	2間(5.3)×2間(4.4)	23.3	3.0~2.4	2.2	SB02	3面廂, 束柱あり
SB09	I区	N-2°-W	5間(12.5)×1間(4.0)	50.0	3.0~2.3	4.0	SB03	東面廂, 束柱あり
SB10	Ⅱ区	N-84°-W	3間(5.5)×1間(3.0)	16.5	2.5~2.0	2.0~1.7	SB02	

第3表 寺田・産宮通遺跡掘立柱建物一覧表

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	けんどうかんけいまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう						
書名	県道関係埋蔵文化財発掘調査概報						
副書名							
巻次	平成7年度						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	藤好史郎・西村尋文・中西昇・蘆原秀稔・中村昭浩・蔵本晋司・東条貴美						
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒762 香川県坂出市府中町南谷5001-4 ☎0877-48-2191						
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター						
発行年月日	1996年3月31日						
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数
51頁	4頁	47頁	-頁	-頁	28枚	37枚	0枚
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
ふりがな 百相坂遺跡	かがわけんたかまつしよぶつしょうざんちよう 香川県高松市仏生山町1382外	37201	34度 16分 8秒	134度 2分 8秒	1995.4.1 ～ 95.6.30	1,400	県道改良工事
こやま・みなだにいせき 小山・南谷遺跡	かがわけんたかまつしんでんちようこう 香川県高松市新田町甲970-1外	37201	34度 19分 21秒	134度 6分 28秒	1995.7.1 ～ 95.11.30	2,654	県道改良工事
はちようじいせき 八丁地遺跡	かがわけんおおかわくしんじようしど 香川県大川郡志度町志度2678番地外	37306	34度 18分 45秒	134度 10分 8秒	1995.7.1 ～ 95.8.31	165	県道改良工事
はげづかいせき 兀塚遺跡	かがわけんたかまつしだんしちようほげづか 香川県高松市壇紙町兀塚201-1番地外	37201	34度 17分 24秒	134度 0分 12秒	1995.9.1 ～ 96.3.31	4,280	県道改良工事
てらだ・さんのみやおりいせき 寺田・産宮通遺跡	かがわけんおおかわくしんじようしだんしちよう 香川県大川郡大川町富田西字大道	37305	34度 15分 54秒	134度 13分 24秒	1995.10.1 ～ 96.3.31	4,404	県道改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
百相坂遺跡	生産跡	弥生時代後期以降	水田跡	弥生土器			
	集落跡	鎌倉時代	掘立柱建物 配石遺構	土師器・瓦器	配石遺構は塚の下部構造		
小山・南谷遺跡	集落跡	奈良～鎌倉時代	溝 井戸 掘立柱建物	金環・銀環・銅製儀鏡・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・斎串	溝は坪界に相当し、規模が大きい。山田郡条里と方向が異なるもので、小範囲の異方位をもつ条里地割り。		
八丁地遺跡		縄文時代晩期	洪水堆積砂?	縄文土器			
		弥生時代後期	自然河川	弥生土器			
兀塚遺跡	生産跡	古代～中世	水田跡・溝	土師器・須恵器・瓦器	2面		
	集落跡	古墳時代後期	掘立柱建物・溝・土坑・自然河川	土師器・須恵器・土馬・鉄鏃・鉄滓・桃核	遺構埋土中より、旧石器・有舌尖頭器出土		
		近世	掘立柱建物・溝・土坑	土師器・陶磁器・銅銭			
寺田・産宮通遺跡	集落跡	弥生時代中期	掘立柱建物	弥生土器・石器(柱状片刃石斧)			
		弥生時代後期末～古墳時代初頭	竪穴住居	弥生土器・丸玉・鏡			
		古墳時代後期末	掘立柱建物・溝	土師器・須恵器	掘立柱建物の面積は約70m <sup>2</sup>		
		平安～鎌倉時代	掘立柱建物・落ち込み・井戸	土師器・黒色土器			

県道関係埋蔵文化財発掘調査概報

平成7年度

平成8年3月31日

編集 財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 富士印刷(株)